

第9回 民話 ゆうわ座 — 話に遊び 話を結び 座に集う —  
伝承のみちすじをたどる ～ 永浦誠喜さん、伊藤正子さんの語りから ～

目次

- ◆ 「民話 ゆうわ座」について 進行 小田嶋 利江 p.2  
(記録 小田嶋 利江)
- ◆ 語り手 永浦誠喜さん、伊藤正子さんについて 解説 小野 和子 p.4  
(記録 倉林 恵子)
- ◆ 語りを聞く 一 p.12
  - 永浦誠喜さん(宮城県登米市南方町 明治四十二年生まれ)  
「ハチとアリの魚の分配」 語り 寺嶋 大輔
  - 伊藤正子さん(宮城県登米市迫町 大正十五年生まれ)  
「ハチとアリとクモのお伊勢参り」 語り 倉林 恵子
  - (記録 小田嶋 利江)
- ◆ 語りを聞く 二 解説 小野 和子 p.15
  - 〈ケヤキ買い〉  
「ケヤキ買い」 伊藤正子さん  
「石巻からケヤキ買いに」 永浦誠喜さん  
〈休憩〉
  - 〈キジも鳴かずば〉  
「キジも鳴かずば」 永浦誠喜さん  
「キジも鳴かずば」 伊藤正子さん
  - 〈尻鳴りへら〉  
「さいしんへら」 伊藤正子さん  
「尻鳴りへら」 永浦誠喜さん
  - 〈民話を聞き語った思い出〉 永浦誠喜さん・伊藤正子さん  
(記録 山田 裕子・加藤 恵子)
- ◆ みなさんと感想や意見の交換 p.32  
(記録 島津 信子)

第9回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江・小野 和子
	語り	倉林 恵子・寺嶋 大輔
	板書	瀬尾 夏美
	撮影・録音	長崎 由幹・福原 悠介
	手話通訳・要約筆記派遣	みやぎ通訳派遣センター
	smtスタッフ	飯川 晃
〈記録〉	文字起し	小田嶋 利江・加藤 恵子・倉林 恵子・島津 信子・山田 裕子

第9回 民話ゆうわ座 — 話に遊び 輪を結び 座に集う —  
伝承のみちすじをたどる ～ 永浦誠喜さん、伊藤正子さんの語りから ～

◆ 『民話ゆうわ座』について

司会進行 小田嶋 利江 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

00:47

【みやぎ民話の会と〈民話ゆうわ座〉】

みなさんこんにちは。コロナ禍の中で、年末の忙しいときにもかかわらず、こんなにたくさんの方が来ていただきまして、ほんとうにありがとうございます。

民話ゆうわ座、今回で九回目になります。第九回の民話ゆうわ座になるんですけれども、毎回最初に、「民話ゆうわ座とはなにか」を説明させていただいているんですが、何回も聞いた方がおられるかもしれませんが、いちおう最初に説明させていただきます。

民話ゆうわ座という時の、民話というのは、一言で言ってしまうと、わたしたちの先祖から、わたしたちのすぐ足元まで、口から耳へ、それから耳から口へと、語り継がれてきたさまざまなお話、いろいろなお話を言います。それは昔話だけではなくて、伝説であったり世間話であったり、世間話にもならないような、もっと小さなすぐ身近なお話も、語り継がれるときに民話になります。私たちみやぎ民話の会は、もう四十年以上、五十年近くの間、そういう広い意味の民話を、山の村、里の村、浜の村を訪ねて、一人一人の民話の語り手をお訪ねして、一つ一つのお話を聞かせていただいて、それを一つ一つ記録してきました。

それが、わたしたちの会の活動の原点なんですけど、この「民話ゆうわ座」では、わたしたちが記録してきたさまざまなお話、映像とか音声で、映像で記録するのはすごく最近のことなんですけど、そうした一つ一つのお話を、一つの手がかりとして、みなさんに見たり聞いたりしていただきます。それがまず一つの手がかりですね。

それから、われわれはそうゆうふうに、一人一人の語り手をお訪ねして、一つ一つのお話を聞きますが、そうゆうことを、お訪ねすることを採訪と呼んでいます。その採訪の折々では、そのお話だけではなくて、われわれがそのお話を聞くにあたって、さまざまなことをお話するんですけど、そこで、さまざまなことをわれわれが問いかけられたり、考えさせられたり、さまざまな体験をします。その採訪の体験をもう一つの手がかりとして、みなさんにご紹介して、その二つの手がかりから、民話のさまざまなことについて、みんなで考えてみようとする場なんです。

で、「ゆうわ座」という名前はどこからきたかというのと、「話に遊び、輪を結び、座に集う」の音を取って「ゆうわ座」としてありますが、その志と言いますか、その意図というのは、先生と生徒とか、目上の人と目下の人とか、そういう格式とか上下関係を離れて、みんな対等に、われわれも参加者のみなさんも対等にその場集って、その二つの手がかりから、さまざまなことを、自由自在に語り合ってみようということで、「ゆうわ座」と名づけています。

05:03

【〈第9回民話ゆうわ座〉のテーマと構成】

今回はですね、「伝承のみちすじをたどる—永浦誠喜さん、伊藤正子さんの語りから—」と名づけられています。永浦誠喜さんと伊藤正子さんは宮城県の語り手ですけれども、日本の中でも類まれなすぐれた民話の語り手です。じつはお二人の語りは、源を同じくする、つまり同じ一人の人の語りを語り継いできた二人の語りなんですけれども、その語り継ぎのみちすじは、それぞれさまざまで、それぞれのみちすじをたどって、

お二人の語りが語られています。そしてはぐくまれていたんですが、同じ一つのお話なんですが、二人の暮らし方、土地柄、人柄、あるいは性別などによって、さまざまなお二人のお二人らしさを映して、それぞれの姿で語られているんですね。

そうしたお二人の語りを、映像を通して聞いていただきます。そして話がどのように、それぞれ変わっていくのか、みなさんと一緒に味わってみようというのが、まず一つの目的なんです。

民話というのはとても不思議なもので、同じ話だからといって、すべて同じに語られるわけではないんですね。一つのたしかに同じ話でありながらも、その話を語り継いだ語り手の広い意味のその人らしさを映して、それぞれの姿で語られます。ただ一つの話ということはたしかなんだけど、いくつもの顔を持つてるんですね。まるで生き物のようなど表現していいのかわかりませんが、そういう民話の姿を、具体的にみなさんと感じられたらいいなと思っています。

これから、お二人の語り手のご紹介をしたいと思うんですが、みなさんもお存知のように、小野和子さんは、東北の山の村から浜の村まで足を運んで、語り手のもとを訪ねて、民話を記録されてこられました。それを五十年余り続けてこられたんですが、その中で、最初るときから伊藤正子さん、永浦誠喜さんのもとを訪ねられて、ずっとお話を聞き続けていらっしやいました。そしてお二人の民話世界を記録した『みやぎ民話の会叢書』として、民話集がお二人とも刊行されています [『第9集「母の昔話」を語りつぐ』(2000 みやぎ民話の会)と『第10集青島屋敷老翁夜話』(2001 みやぎ民話の会)]。そういう深く長い交流の中で、おふたりのさまざまな事に触れえた小野和子さんによって、映像を見ていただくにあたり、まずお二人の在り方を語っていただきたいなと思います。

では小野さん、よろしくお願ひします。

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## ◆ 語り手 永浦誠喜さん、伊藤正子さんについて

進行 小野 和子 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

08:37

こんにちは。ご紹介いただきました小野和子です。よろしくお願いします。

### 【民話を訪ねて出会った語り手たち】

今、小田嶋さんが言うてくださいましたみたいに、私は山の村や海辺の町を細々と訪ねて民話を聞き始めてから、五十年ほどいつの間にか時間が経ってしまいました。初めは一人で心細く歩いていたんですけども、一人二人と仲間が集まって来てくださいますして、仲間が五人になった時に「みやぎ民話の会」という小さな会を発足させました [1975年発足]。何年前になるでしょうかね、忘れちゃいましたけど、そのくらいだいぶ昔になりますけど、一人でとぼとぼ歩いていた私のもとに一人二人と集まってくださった方たちと、それでもせいぜい五人くらいだったんですけども、長年歩いて今日までやってまいりました。

そして、そうやって歩いてきた中で沢山の民話を語る方にお目にかかってきました。ある時はたった一つの話大切に抱いていらっしゃる語り手の方もいらっしゃるれば、ある時は百、二百と豊かな話を披露して下さる語り手の方もありました。語り方や受け止め方はさまざまだったんですけども、どの人からいただいたものも私どもは宝物のように大切に扱ってまいりました。そして、記録してまいりました。

今日はその中で、私が出会ってきました語り手の中でも最も豊かに民話を語り、そしてそれを残して下さった二人の語り手を中心に話を進めさせていただきたいと思えます。後あとですね、このお二人が語って下さっている映像をここで映して披露していく時間を設け、それをメインにさせていただきたいんですけども、私たちの、このなんていうんですしたDVDと言えいいですか、DVDで撮っておいた映像っていうものは、実は今から三十年、三十年はちょっとうそですかね、何年前になるでしょう、忘れましたが、二十年ぐらい前に「民話の学校」という私どもが開いた学校 [第三回みやぎ民話の学校 (2000年8月22-23日 仙台市太白区茂庭荘)] で、お二人が語ってくださったこの映像を撮ってくださった方がいるんです。私どもの会ではそれを撮る才覚もなかったですし、機械も持っていなかったんですけども、参加して下さった方の中で、「これは捨てておけない、大事な映像だぞ」と感じてくださった方があったんですね。そして、その方が撮ってくださった記録があるもんですから、今日も皆さんにそれをお見せすることができるのをとてもうれしく思います。

12:02

### 【稀有な語り手 永浦誠喜と伊藤正子】

それで、永浦誠喜さんとそれから伊藤正子さん、このお二人はですね、今小田嶋さんが日本でも類るいを見ない、という言い方をされましたが、私はもっと言いたい、世界でも類るいを見ない民話の語り手と言っていい方々なんです。それぞれに、永浦さんから私どもがお聞きした話は二百を超えております [総話数は249話]。一回で聞いて二百だったんじゃないんですよ。疑い深い私はですね、永浦さんに最初二百話聞いても、もうこの話はその時のものだろうと思ったので、時間を置いてから「もう一回永浦さん、一から全部語ってください」ってお願いして、一年をかけて再びまた永浦さんから、話を聞かせていただいたことがありますが、驚くべきことですけども、一番最初に聞いた話と本当に寸分すんぶん違わないんですね。例えばある場面で、「雪がのんのん降ってきて」っておしゃっていたとすると、十年、二十年後にもう一遍語ってもらって聞いた時も、「雪がのんのん降ってきて」とちゃんとと言われていて、その形がいつも決まっていたことに本当に驚いてまいりました。それで、永浦さんの話を是非聞いて記録したいというので、最初のうちはですね、永浦さんの話を聞いて、こんな粗末な手書きの資料集を何十冊も作ってまいりましたが、次には、これではちょっともったいないというので、こんなふうな『みやぎ民話の会そうしょ叢書』なんて大きく名乗りましたけれども、叢書そうしょの

形でこんなふうにして、でも、これで上中下三冊でもようやく収まるくらいの話の数だったんですが、こうやって永浦さんの話を残してまいりました『みやぎ民話の会叢書第10集 青島屋敷老翁夜話 登米郡南方町の民話』上中下（2001 みやぎ民話の会）。

14:25

#### 【伝承の源とその流れ】

それで、さきほど小田嶋さんの紹介にもちょっとあったかもしれませんが、永浦誠喜さん、この方は登米郡、昔の登米郡、今登米市ですね、登米市南<sup>みなみかた</sup>方町にお住まいの方でした。それから伊藤正子さんはそのお隣の登米郡新田<sup>にった</sup>〔登米市迫町新田〕にお住まいの方でした。そして、お二人は従兄弟の関係にあると言いましたけれども、二十も年が離れているんですね〔誠喜さんは明治42年（1909）生れ、正子さんは大正15年（1926）生れ〕。そして、永浦誠喜さんは、祖母のよふさんっておっしゃるんですけども、よふさんから直接話を聞いて大きくなりましたが、正子さんのほうは、よふさんを意識するころには、よふさんがもう亡くなっていたもんですから、よふさんの子どもであった正子さんのお母さん、よしのさんっておっしゃるんですけども、お母さんからよふさんの話を聞いて育ったという方なんです。わかったでしょうか、ちょっとややこしい説明になったけれども、永浦誠喜さんと正子さんは従兄弟同士なんです。従兄弟同士だけでも、永浦さんのほうはおばあさんのよふさんから直接たくさん話を聞いて覚えておられたんです。でも、正子さんは二十歳ぐらいも永浦さんとは年の違う従妹なもんですから、ものごごろついた時に、もうよふさんはこの世におられなかったんですね。その代わり、よふさんの子どもとして育った正子さんのお母さん、よしのさんっておっしゃるんですけども、お母さんから毎晩のように聞いた話だと言って語ってくださった、そういう話なんです。

ですから、根本は同<sup>ねもと</sup>じな<sup>おんな</sup>んですけれども、永浦さんは直接よふさんから聞かれ、それから正子さんのほうはお母さんを経て、そして話が伝わってくる、あとで皆さんが映像をお見せした時に感じていただけるかもしれませんが、その伝承の経路の違いがお二人の話に微妙な変化を与えているんですね。たとえば、正子さんの方は、よしのさんが将来嫁に行くであろう娘をおもんばかって、嫁入りの時の心構えのようなものを話に付け加えておられたりですね、一方、永浦さんのほうは永浦家の家督息子ですから、家督息子は毅然として来客にも対応しなきゃならないっていうような、そういうことを話に込められたりしながら微妙な違いを見せておられますが、しかし、芯<sup>しん</sup>のところは本当にまったく同じなんです。私はそのことにいつも驚かされてまいりました。

17:43

#### 【聞き語りの風景—労働とともにある話】

そして、もう一つここで付け加えておきたいのはですね、どういうふうな語りのお二人が聞かれたかかっていうことになるかと思いますが、永浦さんはお姉さんと一緒にですね、おばあさんのよふさんがちょっとでも手を休めてじっとすると、すかさず走って行って話を聞いたって言われるんですね。忙しいんですから話なんか語っている暇はよふさんにもあまりないわけですね、ましてや子ども相手に語ってる暇もないので、それで永浦さんたちは子どもながら、よふさんが、例えば、雨が降ってきて畑から引き揚げて家<sup>うち</sup>の中で藁<sup>わら</sup>打ちなんか始められたり、とにかく、じっと座って囲炉裏<sup>いろり</sup>のそばで縫物を始められたりというふうに、じっと座られるとすぐそばへ行って、「語れ」「語れ」と言ってよふさんから聞いてきた話だと言うんですね。

のどかに寝物語<sup>ねものがたり</sup>のようにして聞いたかと思われるかもしれませんが、そういうふうな形で聞いたことはないうってのは、永浦さんからお聞きした時にびっくりいたしました。よふさんの手が空くとそこをねらって走って行って、お姉さんと二人して「語れ」「語れ」ってよふさんを責めて話を聞かせてもらってきた、っていうのが永浦さんの語り<sup>おんな</sup>の場だったと言われております。

正子さんになりますと、正子さんもやはりですね、夏の日中などは一切話はしない、もし話すとなれば冬の夜だった、って言われるんですね。冬の夜、やっぱり火鉢を囲んだり囲炉裏のそばに寄ったりしながら、縫物をしたりそれから何か藁打ちをしたりというふうに手を動かしながら話をしてもらったって言うんです。

ですから、今は皆さんのイメージの中では、昔ばなしを語ってもらったなんて言うと、語る人がいてそばに子どもたちが嬉しそうにつめかけてきて、その子たちの顔をみながら語る人は語っていただろうと想像されるかもしれませんが、永浦さんにおいても、それから、正子さんにおいても語りの場にはいつも労働が伴っていたことを、何度も何度もおっしゃいました。「いつも手は動いていたのよ」って言われるんですね。手を動かしながら話を聞いていた、ですから、なんていうかしら、時には孫たちを面白がらせるというよりは、縫物をしたり藁打ちをしたりしている語り手その人が、自分の眠気を覚ますようにして子供たちを寄せて語っていた、そんな気配さえあった、というふうにお聞きしました。ですから、語りの場というようなものを私どもは簡単にイメージしますが、それは、いつも私どもの先祖が残してくれた形では労働と共にあったことを、私はここで声を大にして皆様にお告げしておきたいと思います。ですから、私たちがそんなふうにして永浦さんや正子さんから受け継いだ民話は、そういう労働の中で語られて、汗と一緒に私たちのところへここまで来てくれているのだということを、忘れたくないといつも思っています。

#### 【聞き語りの風景—みなとともに聞く話】

それからですね、永浦さんもそれから正子さんも、じゃ、一対一でお母さんやおばあさんから話を聞かれたかって言うとそうじゃないんですね。さっきも言ったみたいに永浦さんは姉と一緒に聞いたとおっしゃるし、それから、正子さんに至っては七人兄弟の五番目でいらっしゃるんですね、それで下から二人目だったそうです、正子さんは。それで、お母さんが話し出すとみんな寄ってくると、上のお姉さん方も夜なべ仕事をしながら、お母さんが語り出すと耳を傾けて、そして何となくみんなが集まって聞いてきたというふうにおっしゃいました。

でもね、ここが物語のふしぎなところだと思うんですけども、その話を覚えている人っていうのは本当に兄弟の中では一人か二人なんですね。五人で聞いたら五人ともその話を覚えていてくださるのかなと思うと、そうじゃなくて、たいていその中のお一人だったりお二人だったりするんですね。永浦さんもおねえさんと一緒に聞いたって言われるけれども「お姉さんよりも俺の方がよく覚えていたと思うよ」っておっしゃるくらいなんですね。それから、正子さんに至っては兄弟が多くて、正子さんは五人目だったわけですけども、他の兄弟たちに「あんな話こんな話あったね」って言うと、「うん、あったような気はする」って言うんだけど、ほとんど話の中身は覚えていない。でも、正子さんに至っては本当に細部にわたる描写で私どもに物語を聞かせてくださいました。

23:36

#### 【伊藤正子さんとの出会い】

細部にわたる描写で聞かせていただいたと今言いましたけれども、私どもが正子さんのもとを訪れて、初めて正子さんに話を聞いたのは一九八五年のことでした。そこに来てくださっている早坂さんと一緒に初めて伊藤正子さんのところを訪れた日のことを思い出すんですけども、正子さんはですね、その時に非常に落ち着かない振る舞いで私どもを迎えてくださいました。そして、トラックが大きな箆箆なんかを降ろしていくんですね。何事なのかと思って後でわかったんですけども、その日は東京へ嫁がれた次女の京子さん、この方がやっぱり一番子どもの中では物語を好まれた方だったようですが、次女の京子さんが病気で亡くなって、そして大きな箆箆やなんか返されてきた日だったんですね。早坂さんと二人でその返されてきた箆箆を見ながら、正子さんに「昔ばなしを語ってください」ってお願いした記憶があります。その東京

のお嬢さんが亡くなったってことも知らなかったもんですから、その時は無邪気に話をお願いしたんですけども、そうしたところ正子さんはその時、鮮明に覚えているんですけれども、「こうやって人に会って話しをするのはのは初めてだ」って言われるんですよ。

これはちょっと説明がいりますが、実は、宮城県の民話を非常によく集めて本に現しておられる佐々木徳夫<sup>とくお</sup>先生っていう方がおられるんですけれども、佐々木徳夫先生の本の中には必ず正子さんの話が入ってたんですね。ですから、正子さんに「そんなことはないでしょう、佐々木先生の本にもいつも正子さんの話が出てくるんじゃないですか」で言ったら、驚いたことに、「佐々木先生に会ったことがない」って言われるんですよ、「どういうことですか」と、ますます驚いて聞きましたら、その東京で亡くなった京子さんの高校時代に、佐々木徳夫先生はその高校の先生だったって言うんですね。子ども達に、「家でおじいさんやおばあさんに昔ばなしを聞いて書いて来なさい」という宿題を出されたそうです。正子さんのところの、京子さんって言われるんですが、その京子さんもお母さんに「昔ばなし書いて来いってという宿題出たんだけど」と言うので、正子さんはもともと昔話がお好きだったから喜んで語ってやったら、そしたら京子さんは一生懸命それ書いて、はじから佐々木先生に提出したって言うんです。ですから、佐々木先生はそうやって提出された紙で正子さんの話を聞いておられたけども、「会って一度も話したことがないんだ」って正子さんが言われた時には、私も早坂さんもびっくりしてぼかんとしてしまったくらいに、佐々木先生の本には正子さんの話がいっぱい出てきていたんですよ。

### 【正子さんを変えた民話の力】

それで、正子さんは後にまたわかるんですけども、大変な対人恐怖症みたいなところもあって、なかなか人と打ち解けて話すこともできない、恥ずかしがり屋でいらしたっていうこともあったんでしょう、「とにかく人と話すのが嫌いだ。でも、次女の京子が宿題で昔ばなしを聞いて来いって言われたら、うれしくてうれしくて、絶え間なく語って、京子は一生懸命それを書いて先生に出した」って言うんです。それが佐々木先生の手元にあった正子さんの話だったんですね。私と、一緒に行った早坂さんは、そのことばを聞いてびっくりたまげてしまって、あちこちで素晴らしい話を語っておられる正子さんという印象を持っていたのに、「人の前で語るのは初めてだ」って言って、私と早坂さんに語ってくださった日のことが忘れられません。

そして、その日は東京で亡くなった娘さんの荷物が、花嫁道具として送られた荷物が返されてきた日でもあったんですね。正子さんはそんなことは私どもにおくびにも出さないで、「面白い話一つと悲しい話一つするからね」っておっしゃるんですね。もっといっぱい聞きたいと思って意気込んで行ったのに、面白い話一つと悲しい話一つじゃちょっと物足りないなと思ったんですけれども、その時の正子さんの心もちを考えますと、それが精いっぱい、突然に現れて話を聞かせろと言ってきた私たちへの好意だったと思うんですけども。本当に変なことばかりする馬鹿婿<sup>ばかむこ</sup>の話と、それから、悲しい継子話<sup>ままこばなし</sup>の「お月とお星」と、その二つだけを心を込めてその時語ってくださって、私と早坂さんはその二つの話をいただいてその日家へ帰って来たことをよく覚えております。

そのあとですね、正子さんは次第に人の前でも語られるようになっていかれたんですね。そして、少しずつ少しずつですけども、「民話を通して私は人と接することができるようになった」ともおっしゃいましたけれども、人と話もできるようになった。

### 【〈民話の学校〉で多くの人に語る】

そういう中で、私どもみやぎ民話の会が毎年ではないんですけども〈みやぎ民話の学校〉っていうのを

時々開いてきたんです。どういう学校かって言いますとね、私どもが親しくさせていただいている語り手の方々をお呼びして、その方々に、直接皆さんに話を聞いていただくという学校なんです。私どもがいくら活字にしたり、こんな話があるんですよって代わりに語ってみたりしても、とても追いつかない。でも、語る人をお連れしてその人たちに語ってもらえば一番効果があると思ってですね、ほんとうに、多い時は十四人もね来てもらってずらっと並んでもらいながら、参加した方に生の語りをその場で聞いていただくという、今思うとすごい贅沢な場を用意して学校をやったんですよ。

正子さんにもそういう時には必ず出て話をしてくださるようになって、そして正子さんの語りは非常に素晴らしいもんですから、その語りをみんなの前で正子さんが披露してくださった。「民話は私の恩人なのよ」っていつかも言ってくださいましたけども、「人に会っても『こんにちは』も言えなかったのに民話を語ることを通して、人とちゃんとつきあっていてお話もできるようになったのよ」っていうことを言ってくださった日のことを私は忘れられません。そして、「あんたがたに感謝しているのよ」と言われて、こっちが感謝しているのになんとお返事していいかわからなかったんですけども、正子さんは本当に涙をこぼしながら「あんたたちに感謝しているよ」って言ってくださった日のことを私は今もありありと覚えております。

31:59

#### 【宮城の民話と佐々木徳夫氏】

そして、今さっきも佐々木徳夫先生の名前を出しましたが、宮城県では民話を集めてそれを文字にしている、それから民話を一生懸命歩いて集めてくださった先達がおられまして、それは佐々木徳夫先生という方で、私も一番初めにどうやって聞きに行っていかわからなかったもんですから、佐々木徳夫先生のところに行き、「私を一回連れてってください」って言って、二回くらい連れて歩いていただいたことがありました。おもしろいでしょう、だいぶ昔のはなしですけど、そのころはね、先生はテープレコーダーをリュックに背負ってらしたんです、そのくらい大きいわけですが、テープレコーダーってものが。今のように小さいのがないからリュックに背負って、私はテープレコーダーもないから一生懸命ただ書いている、っていうそういう時代だったんですけどもね。

そういう時代の中で佐々木徳夫先生が正子さんとそれから永浦さんの話を聞いて、そして、佐々木徳夫先生が集められた民話集を見ると必ず正子さんの名前が出てくるんですよ。さっきも言いましたように、だから、正子さんとはよほど親しいと思ってたら実はそうではなくて、正子さんが自分の子どもに語って聞かせて、その子どもの京子さんがそれを一生懸命文字にして佐々木先生に提出して、佐々木先生はそれを本の中で使われていたんだということが後でわかったんですけどもね。

それで、永浦さんはやっぱり男ですから、ちゃんと佐々木先生に話を語っておられて、『永浦誠喜翁の昔話』[1975 日本放送出版協会]という本も一冊出ています、NHK ブックスだったと思いますが。私もそれを手に入れて読みましたけれども、私どもが聞く永浦さんの話とはだいぶ違うんですよ。

#### 【みやぎ民話の会の記録の姿勢】

何が違うかって言うと、やはり私どもは少々頭が足りないもんですから、聞けば聞いた通りに書いていくわけなんですけれども、佐々木先生は整理して書いていられるもんだからすごく話はスムーズに運んでくるんですけども、私どもが聞く話とはちょっと味がどうしても違ってくるっていうことがあったんですね。やっぱりこれはそういうふうな筋書きを、民話は筋書きを大事にするのではなくて、やっぱり語ってくださる方の呼吸とか、その呼吸がどういう時にどういう形で出てくるのか、労働をしていた時なのか、それともみんな家で一家団らんでお茶を飲んでた時なのか、それによってすごく語る呼吸が違ってくるんですよ。私たちは未熟ながらなんとかその呼吸を大事にしたいと考えて、なるべく聞いた通りに、時にはお嫁さんの悪口

まで入ってくるんですけども、それも含めて記録していきましょう、っていう本当にそこはなんて言ったらいいでしょう、要領が悪いと言ったらいいか、なんかうまく言えませんが、私たちにできる方法は単に一生懸命に聞いてそれを忠実に書くっていうことのほか方法を知らなかったわけで、それを一生懸命やってまいりました。

間違いもいっぱいあったと思うんですけども。ですから、話を整理したり、それから、「ええっと」って一息つかれる時のそういう「ええっと」みたいなのも全部私たちの資料集には入っているわけなんです。読む人が読めば非常におかしいと思うので、これは人に見せられないと思って、仲間たちにも私はいつも「これは手の内の資料だから人には見せるんじゃないよ」って言って。そして、ちょっと持ってきましたがこんな粗末なものを山のように作ったんですね。こういう手書きでガリ版で刷っているんですよ。このころはガリ版でガリガリ切ってね、そして<sup>とうしゃばん</sup>謄写版で刷ってんですよ。こういうのを何十冊も永浦さんだけでも作ったんですけどもね。こんなふうにして、なるべく聞いたままを私たちは聞いてきましょう、っていうことを大事にしていきました。

36:48

#### 【宮城県の民話伝承調査】

そして、未熟な者の集まりですので、そうは言いながらもなかなかまとまった話を聞くということが難しかったんですね。そういう私たちに、なんて言いますか、<sup>ひとすじ</sup>一筋の光とでも言いますか、宮城県の<sup>ぶんかざいほごか</sup>文化財保護課っていう所から、「民話伝承調査というのがこのごろ文科省の方で<sup>もんかしょう</sup>流行ってやるので、民話を集めて整理して発表してくれる人がいないか探していたけれども、わらべ歌やそれから伝説だと人はたくさんいるけど、民話っていうと、嘘か本当かわかんないような話だし、爺さん婆さんが出てくる、まあどうしようもないような話が多いから、引き受け手もないんですよ」ということで、誕生して間もなかった私たちのところにこの話が舞い込んできたわけなんです、県からね。

それで若干ですけどもお金ももらったもんですから。そして、何よりもお金よりうれしいのは「県の調査です」って言うと大きい顔ができるわけです。そうでないとぼんやりして「昔ばなし聞かせていただけませんか」なんて行くとね、「少しこいつ頭がおかしいんじゃないか」と思われるわけですね。「何しにそんなもの<sup>ひま</sup>聞きに暇だれて来てんだ」って。でもね「県の調査です」って言うとね、そこに<sup>たいぎめいぶん</sup>大義名分ができて大きい顔ができて、あの時の嬉しさはちょっと忘れられないんですけどね。いつもは小さくもじもじもじもじしながら「昔ばなし覚えてたら聞かせていただけませんか」って言うと、「聞いてって何するんだ」なんて言われても、<sup>なに</sup>何ともうまく答えられないままもごもごしながら、それでもなんとか一つ二つ聞いて来るといような頼りないやり方をしたもんですから、急に今度は「県」という手形をもらってそれ持って行くようになったもんですからうれしくてなっちゃって。

そして、ただその機会を私どもは大いに活用いたしました。そして、三か年の調査期間 [1986～1988 年] だったけれども、だったかしら、忘れちゃったけども、いっぱい、ね、二千あまり、もっと三千ぐらいでしょうか [民話 2513 話 話者 388 人]、私も数も忘れちゃったんですけど、とにかく毎日のように、盆も正月もなく歩いていたんです、その三か年はね、「昔ばなし、聞かせろ、聞かせろ」って、あっちこっち行って。でも、県の調査ですからって言うと大きな顔ができるわけですね、そうやって話を一つ二つ聞いてきて、その三か年だけで非常にたくさんのお話を聞いて、こんな厚い報告書を作って県のほうに出しました [『宮城県文化財調査報告書第 130 集—宮城県の民話 民話伝承調査』(1986 宮城県教育委員会)]。

そのころそういうことが<sup>はや</sup>流行っていたんですよ。「ふるさと<sup>そうせい</sup>創生」なんて言うことばもありましてね。どの県でもそれをやっていたらしいんですけども、宮城県みたいに馬鹿みたいにこんな厚いのを作っていたのは珍しい、って言って変な褒められ方をしたんですけど。他県のはどうなっているかという、だいたい薄べ

らい二センチぐらいなんです、きれいな本なのね。私たちのだけ四センチか五センチくらいもあるような太い本になっちゃったわけです。なんせすごくたくさん聞いたもんですし、それを全部載せようと思って載せたもんですからね [総話数 2513 話のうち 274 話を収載]。でも、その時にやっぱり、そういう県の委託で仕事をしたというのは大きいことでして、そのあとに繋がるつてをいっぱいもらったという気がしますね。

40:45

#### 【誠喜さん、正子さんの採訪と文字記録】

で、永浦さんもその時に泊りがけで来ていただいてね、<sup>もにわ</sup>茂庭荘に泊まったりどっかの安宿に泊まったりしながら話を聞かせていただきました。「永浦さんが覚えていらっしゃるのをみんな聞かせてください」って言って聞かせていただきました。

正子さんは今さっき言ったような事情であんまり外へ出てこれられない性格でもいらしたもんで、とにかく通って行っては早坂さんと二人で話を聞いて早坂さんがたくさん正子さんの話を資料集にまとめてくださっております。こういう粗末なものでこういう形なんですけどね、でも、その時に正子さんや永浦さんから話をたくさん聞いたということは、すごい私どもの財産になりました。

もちろん、たった一つの話を知っているという方の話も私たちはこの上なく大切にしてきましたが、このように豊かに話を次々に聞かせてくださるということに巡り合うのもまたすごくうれしいことだったもんですから、その両方を私どもは調査と言う名目でやってきたのです。

それで、私はですね、また話が前後しますが、まず永浦さん・正子さんが記憶しておられる昔話を私たちは何としても文字として残したいと願いました。それで永浦さんとその調査の時には、こういうなんていうかしら急ごしらえみたいな資料集を二十冊近く、もっと作ったかしらね、忘れちゃいましたくらいですけどいっぱい作りました、それでも足りないぐらいだんたんですよ。

#### 【誠喜さんの話を全話聞く】

それで永浦さんから聞いた話をですね、私はのちにもういっぺん永浦さんのところに行きました。そこにおられる山田<sup>ゆうこ</sup>裕子さんと私と裕子さんのご主人の山田<sup>かずお</sup>和郎さんとそれから今は亡くなりましたが秋山<sup>しんじ</sup>伸司さんという方が、四人で永浦さんのところに頼みに行って、「すでに一回聞いてますけれども、もう一回永浦さんが覚えている話を全部聞かせてください」って頼みに行ったんですよ。

すでに私たちは永浦さんから二百話あまり聞いてて記録していたんですけども、心の中ではあの話は十五年ぐらい経ってましたので、十五年経った今は永浦さんの中でどうなっているのかしら、忘れてしまわれたんじゃないかしらって、疑いの気持ちもあって永浦さんにそれを頼みに行きました。あの日のことを私もよく覚えてんですけどね、永浦さんはいたずらっ子みたいに私たちを見てにやっとなんか「いがす、いがす」って言って、そして、それから月に一回ずつ朝から晩まで疲れ果てるまで、話を一年余り永浦さんから聞きました [1999年10月～2000年7月]。

そして、驚いたんですけども、その前、十五年前に聞いていた話と寸分<sup>すんぶん</sup>違わないんです、十五年後にもういっぺん永浦さんに全部聞いた話が。私たちは本当に涙をこぼして感激いたしました。なにかを見て話されるんじゃないんですよ、なんにもご覧にならない。で、私たちが、例えば「お月お星の話してください」とか「かもとりごんべーお願いします」とか、こっちからなんか言うとそれに応えて永浦さんは話して下さるんですが、本当に驚くべきことでこれは世界にもあまり類<sup>るい</sup>がないんじゃないかと思うんですが、永浦さんの頭の中にはそれらの話がきっちり入っていて、ずっと昔に聞いたのと同じ形で。

#### 【語り手永浦誠喜さんのたたずまい】

一九九九年でしたね、そのころに二回目聞きに行ったら朝から晩まで語ってもらって。そして、私たちが聞き疲れてごろごろしているのに、永浦さん一人元気で次々語っておられて、後で聞きましてら、病気をしておられて点滴を打ちながら私たちのお願いした場所へ出て来てくださったことを、後で知りまして...ごめんなさい涙が出てきますよ、こういう話をすると...出て来てくださったんですね。そして、二百数十話[249話]の話を一年ちょっとかけてですよ、十回ぐらい、一回で二十九話とかそのくらいを朝から日が暮れるまで語ってくださったんです。聞いているほうが眠くなっちゃって、こんなになっているんですけども、永浦さんのほうはしっかりして語って...

#### 【民話集の刊行—『みやぎ民話の会叢書』】

ですから、こういうことをなんと皆さんにお伝えしていいかわからないんですが、こういう方がいてこういう形で昔ばなしが伝わってきてたんですね。私たちが十五年前に聞いた話とすっかり同じ話を、また私たちはもういっぺん聞いて、そして、もういっぺん聞いたものを元にして、今度はこういう『青島屋敷老翁夜話』[2001 みやぎ民話の会 249 話収載]なんて気取った名前をつけたんですけれども、これの上中下三冊の本にしてみなさんに、一一冊千円ですよ、安いでしょう—売ったわけです、安い安いと言って皆さんに売ってきたわけです。で、次の物を出すための資金にできたというわけなんですね。永浦さんっていうのはそういう語り手でいらっしやいました。

#### 【源を一つとする二人の語り手—永浦清喜さんと伊藤正子さん】

そしてまた、伊藤正子さんもこれに負けず劣らずの語り手でいらっしやいました。本当に正子さんは永浦さんが亡くなってから、私どもはしばしば正子さんを連れ出したり訪れたりしながらその話を聞かせていただいたんですけれども、正子さんの話も永浦さんと非常によく似ています。なんせ、よふさんというおばあさんのもとに出てきた話です。でも、永浦さんはやっぱり永浦家の家督息子におばあさんが語られているという話の風合いをもつんですけれども、正子さんの場合はいずれ嫁に行くであろう娘に語る話として、非常にまた語りの中身が違ってきているんですね。

46:00

そのことを今日はここで映像を見ながらみなさんとともに考えさせていただきたいと思います。ちょっと私の話はあっち行ったりこっち行ったりしてわかりにくかったかも...私のこのつまらない話が長引いてて申し訳ない気がするんですけれども、そんなふうにして永浦さんと、それから正子さんから私たちは話をずっと聞き続けてきたわけです。そして、非常に拙い形ながら永浦さんのものは『青島屋敷老翁夜話』[上中下2001 みやぎ民話の会]というこういう形で三冊の本にさせていただきましたし、それから、正子さんのほうは、まだもう一冊作りたかったんですけどもお金と労力が伴わなかったんですが、それでもこの中に百十三話の正子さんの素晴らしい語りが入って、そして、それをまとめております。「みやぎ民話の会叢書」[『母の昔話』を語りつぐ』(2000 みやぎ民話の会)]として一生懸命売ってきたので、みなさんの中には買ってください方もいたかもしれませんが。

こうして細々ではありますが、語りの火をですね、私どもはなんとか繋いでまいりたいと思って微力ながら活動してまいりました。そういうふうにして得てきたものを今日ここで皆さんの前に披露させていただけるのをとても幸せに思います。私の話が長引いていきますけれども、待っておられる方も多いと思うので映像のほうを..... (拍手)

◆ 語りを聞く ー

語り 寺嶋 大輔・倉林 恵子 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

46:37

小田嶋—ありがとうございました。

メインには、いまご紹介いただいた、伊藤正子さん、永浦誠喜さんの生の語りを映像でみなさんに聞いていただくんですけども、その前にですね、一つの、お二人の語りの入口として、導入として、とっても小さなお話を、お二人の語りとして記録したものの中から、会員がみなさんに語ってみようかなと思うんですね。それを入口として、その後に映像を見ていただこうと思います。

同じ一つの話が、お二人の語りとして二つの語りになったちいさなお話なんですけど、まず、永浦誠喜さんのお話は、「ハチとアリの魚の分配」という小さくてかわいいお話なんです。それを寺嶋大輔さんに、それから、正子さんの「ハチとアリとクモのお伊勢参り」という、やっぱり同じお話なんですけど、これを倉林恵子さんに語っていただきます。

ではまず、誠喜さんの「ハチとアリの魚の分配」これを寺嶋さんをお願いします。

48:26

◆ 永浦誠喜さん「ハチとアリの魚の分配」

語り 寺嶋 大輔 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

むがすい、ハチとア리가、浜辺で遊んでらったんだと。

したらね、ニシン落ちてんの、目さ入ったんだと。して、ア리가そいつ、食いようと思っただらば、ハチが、

「待で、待で」

て言うんだと。

「なしてや」

て、ア리가語ったらば、

「そいつは、おれのだど」

て言うんだと。

「なじよなわけだ」

と、ア리가聞いたらば、

「『ニ四んが八』て言うでねえが。『にしんがはち、ニシンがハチ』て言うから、そいつは、おれなだ」

て言うんだと。

そいでまあ、しゃあねえから、アリは、ハチさ食<sup>か</sup>せたんだとね。

してしばらくたって、また遊んでるうちに、こんだあ、タイ、落ちてたんだと。して、ハチは、空から飛んで見てる。アリは、土から這って見てる。そいで、二人していっしょに手えかけたんだと。

したらこんどあ、ア리가、

「待で、待で。お前、この前、『ニシンがハチ』って言って食<sup>めえ</sup>ったっけ。だからこんだあ、おれなだ」

て言うんだと。

「なに、なんも関係ねえべっちゃあ」

てハチが言ったれば、アリが、

「『有り難<sup>がて</sup>え』『ありがたい』って言葉、知やあねえのか。『ア리가タイ』って相場だから、こいつはおれなだ」

て言うんだと。

そいで、こんだあ、アリが仲間集めて、タイ食ったんだとしゃ。

こんで、えんつごもんつごさけだど。

小田嶋—ありがとうございました。

「二四が八」で「ニシンがハチ」、「有り難い」で「ア리가タイ」。こうゆう、とってもシンプルな言葉遊びの楽しいお話、かわいいお話なんですけど、この同じお話を、正子さんは、またちよっと違った形で語られています。つぎに正子さんの、「アリとハチとクモのお伊勢参り」、これを倉林恵子さんにお願いします。

51:20

◆ 伊藤正子さん「ハチとアリとクモのお伊勢参り」

語り 倉林 恵子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

むかあし、むかしね、あつとこにね、アリとハチとクモがいだんだとな。

あるとき、三匹は、連れだつて、お伊勢参<sup>めえ</sup>りさ行くことになったんだつて。

「やあやあ、とちゅうでなにが拾ったらやあ、みんなで仲よぐ分げるこつたど。一人占め、しねえこつたど」

て約束して、長い道中の旅に出かけたんだと。

どんどん行つたれば、まずアリが、<sup>じえに</sup>銭<sup>め</sup>っこ百文、見つけたど。したっけ、アリはね、

ハチは 八文なあ

クモは 九文なあ

アリは ありつたけなあ

て、節回しよおく、歌いながら、ハチに八文、クモに九文やって、残りの八十三文の<sup>じえに</sup>銭<sup>め</sup>っこば、さっぱど、自分のものにしてしまったんだど。

ハチとクモは、

「こんでえ、約束が違う」

て思ったけども、なじょにも仕方ねかつたんだと。

そしてまた、どんどん行つたつおんね。それからしばらく行つたっけ、こんどは、ハチがニシン拾つたんだと。脂ののつた、うんまそうなやつでね、ハチは、分けてやるのが惜しくなつたつおん。

にしんがはち 二四が八

ほんだから ニシンはハチのもんだ

ハチはこうゆって、だれさもやっぺとすねえで、さっぱと自分ばり食ってしまったんだと。

「こんでえ、約束が違う」

と、うんとごしええだクモは、<sup>なげ</sup>長え足で、わさあ、わさあ、わさあと、先まわりに行ったっけえ、とろとろつつう、<sup>め</sup>飴っこ見つけたと。

そこで、クモはね、

雲は 雨のさきがけ

クモは 飴のさきがけ

ほんだから 飴はクモのもんだあ

て歌いながら、さっさと一人占めしたんだとっさ。

えんつごもんつごさけえだ

54:20

小田嶋—ありがとうございました。どっちもかわいいお話ですよ。さきほどの小野先生のお話のように、この二つの話は、とっても小さいお話なんですけど、どちらも源の同じ、祖母のよふさんから伝えられたお話だと思われま。

たしかに聞いていると、「あ、同じお話だな」と分かるんだけど、でも細部を見ると、とっても味わいがいろいろ違って面白。それが不思議なところなんですけど。

まず登場人物が、ハチとアリの二人だったり、ハチとアリとクモの三人だったり違ってきたり。

それから、言葉遊びのところも、「ニシンがハチ」っていうのはおんなじだけど、あとは違ってたり。

正子さんの方は、唄を歌うように、唄の文句のようになっている、詩のようになっている、ていうところも違いますよね。あと状況というんですかね、正子さんの方は、お伊勢参りに行く。ハチとアリとクモがお伊勢参りに行くっていうのも面白いんですけど、道中のような状況になって、細やかになっているところも、なかなか面白いところです。

こうゆうふうには、同じ話っていうのは、骨格が同じだから分かるんですけど、でも違う顔をしている、語りになっている。それが民話の生きている姿というか、不思議なところなんですけど、それをこれから、正子さん、誠喜さんの生の語りを、見ていただくことで、聞いていただくことで、味わっていききたいと思います。

これから映像の案内役は、やはり小野先生にお願いしたいと思います。

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## ◆ 語りを聞く 二

解説 小野 和子 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

56:26

### 【〈みやぎ民話の学校〉と二人語り】

正子さんと永浦さんをお招きして、わたしたちもみやぎ民話の会は、正子さんと永浦さんだけじゃないんですけども〈みやぎ民話の学校〉というのを開いてきたんですね。そして、第三回目の民話の学校 [2000年8月22～23日 仙台市太白区茂庭荘] のときに、ひとつの特集のようにして、正子さんと永浦さんに同じ話をその場で語っていただくという場を設けました。これはひじょうにおもしろかったんですけども、ようさんから直接話を受け取った永浦さんの語り、それからよしのさんというお母さんをとおして受け取った正子さんの語り、この二つが類似点を見せながらそれぞれの趣を異にして語られた、ひじょうにおもしろい映像が撮れたわけです。

なぜわたしたちがその映像を撮ったかといいますと、私たちがそういう才能がまったくないグループだったので、機械も持っていなかったし撮ることもできなかつたんですけども、参加して下さっていたお一人の広瀬さんとおっしゃるんですけど、私どもの会に入ってきたばかりの広瀬さんて方がいて、その方のご主人が映像で撮ってくださったのね。そのためにこの貴重なものが残ったわけです。私たちの力だけだったら消え去って行ってしまったに違いないものが、広瀬さんのご主人がそこに参加して下さって後ろの方で映像を撮ってくださったために、それが残りました。私たちは広瀬さんをお願いしてその映像を分けていただいてきましたので、それを今から見ていただきたいと思います。私が口でなにを言っても追いつかないほどおふたりのそれぞれの語りが素晴らしいし、楽しいし、おもしろいので、どうぞゆっくり見ていただきたいと思います。

一番始めに「ケヤキ買い」という、ちょっとそうですね、ええ...エッチな話なんですけれどもね、言い方がおかしい、なんて言ったらいいかわかりませんが (笑)、それがひじょうにおもしろい、品のいいエッチな話とでも言ったらいいでしょうか (笑)、そういう民話ならではの趣で、おふたりが「ケヤキ買い」っていう話を語って下さっているので、どうぞ見ていただきたいと思います。

59:48

正子さん、こうゆうところに出てくるのね、すごく抵抗のある方だったんですけども、わたしたちのこの学校には、いつも機嫌よく出てきて下さって、みんなにいっぱい話をしてくださいました。そのときもわりわりお願いして、永浦誠喜さんと正子さんおふたりに、「おんなじ話をどうぞ語ってください」ってお願いして語っていただいた話で、さきほどの「アリとハチとクモのお伊勢参り」もそうでしたけども、こんどの「ケヤキ買い」もね、ちょっとほんとに...なかなか言いようがわからないんですけど、ちょっとエッチな話なんですね。そこがひじょうに品がよくて、面白くて、「エッチってことはすごい品がいいことなんだな」って、このときわたしは教えられましたのね。それをみなさんも感じていただきたいと思います。

じゃ、映してください。

\* \* \* \* \* 映像上映 \* \* \* \* \*

## 〈ケヤキ買い〉

### ◆伊藤正子さんの語り

#### ケヤキ買い

01:01:00

むかあしむかし。

おずんつあんとおばんつあんが住んでらんだとね。その家にね、庭のすみっこに大きなケヤキの木があったんだと。とってもいいケヤキでね、

「ケヤキ売ってけねべがあ」

って来る人が何人もいたんだと。

ところが、おずんつあんがね、

「なあに、このケヤキ売んねえだって、銭っことも不自由ねえし、いいちゃや。まだ売んねえ。」

「売んねえ」「売んねえ」って、なんぼ買う人が来ただって、売る気ねがったんだってね。

んだけども、そのうちだあんだんにおずんつあんもおばんつあんも年とってしまっ、おずんつあん、さあっぱり耳聞けなくなってしまったんだと。

あるときね、二人の男達<sup>だつ</sup>が来て、おずんつあんさ語ったって耳聞けねから、おばんつあんが相手してらんだと。そして、いろいろ語ってたんだとね。そしたら、おずんつあんがね、おばんつあんさ

「ばんさまや。あの人達<sup>しだつ</sup>、なあんさ来たのやあ」

って聞いたんだと。

そしたら、おばんつあんがね、おずんつあんの<sup>まった</sup>股ぐっと広げて、<sup>まった</sup>股さ手えやって、毛っこ一本抜いたっけど。そして、そいづ炉端の火さくべたんだと。

したら、ぽっと燃えたと。そいづを見てたおずんつあんが、

「ああ、ケヤキ（毛焼き）買いがあ」

って言ったっつおね。

「なんぼで買うってや」

て語られたから、おばんつあん、今度あ、自分の<sup>まった</sup>股いぎなり広げて、ばたん、ばたっ、と二回<sup>はだ</sup>叩いた。そしたらおずんつあんがね、

「ニマン（女性器）円。二万円で安いっちゃやあ。いままで大きくして二万円で安いっちゃや」てやれた。

そしたら、またこんど、おばんつあん、いぎなり<sup>まった</sup>股広げて、指さしたんだと。こうやってね。そしたら、おずんつあん、

「なにい、中さ穴あいてらってえ。空洞<sup>くづへ</sup>入ってたんでは仕方ねえ、仕方ねえ。ほんだらば、二万円で売れっちゃや」

とな、そのケヤキ、二万円で売ったっけど。

## えんつこもんつこさげだ

小野—それでは今度は同じ「ケヤキ買い」を永浦誠喜さんに話していただきます。

永浦—はい。わたしのやつ、ちょっと変わってんだ、やっぱりね。

### ◆永浦誠喜さんの語り

#### 石巻からケヤキ買いに

むがし。

ある家の門口かどぐちのほうに太いケヤキの木あって、そごの家うちは年とったおずんつあんとおばんつあんはもうなにも仕事しなくなったから、旦那殿だなの（家督）は息子さ譲って、毎日寒いんで火さあだって、火いどんどんと焚いて、そして、当たってばりいたんだと。

あるとき、どごからかお客さま来て、そして、旦那殿してた息子が案内して外さ行って、そしてまた帰ってきて、金、旦那殿さ置いて、そしてお客さま帰ったと。

おずんつあんは耳聞けなくなっていて、なんぼたかごえ高声出しても、さっぱ聞けなくなってしまうたんで、おばんつあんはいつでもおずんつあんの通訳を、いろんなことで、動作でやってらんだと。

「いま来たのあ、ばば、あれどごの人達だ」

おばんつあんは考えたすえに、火い焚く囲炉裏かんげの片隅に、昔のことで火打ち石あったから、火打ち石手さとして、そして、こっちの手でくるくると回したと。

「なにい、ん、ああ、石巻いしのまきの人かあ」

て。そして、

「なにさ来たんだ、あれ」

おばんつあん、自分の髪かみの毛抜いて、そして火の燃えてっどごさ、燃やしたと。

「ケヤキ（毛焼き）買いかあ。金置いてったっけ、あれ、売ったんだべ。なんぼで売ったもんだ」

そしたら、おばんつあんが、おずんつあんのまった股さ手え入れて、品物（男性器）上から持ちあげたと。

「なに、金二両。あのぐれえのケヤキ、安かったべっちゃ」

したれば、おばんつあんが、お尻しつぽをまぐって、おずんつあんのめえ前さ出したと。

「ああ、空洞くづつあ入っでだのがあ。空洞くづつう入って穴あいてだんで、はあ、仕様しやあねえべな」  
って。そういうお話でがす。

\* \* \* \* \* 映像終了 \* \* \* \* \*

1:07:30

【〈ケヤキ買い〉に見る民話の芯】 こういう話でございます。なんかね、わたしは、この話が大好きで、おふたりはね、「大勢おほしの人の前で昼間から語るような話じゃないから嫌だ」って言われたんですけど、無理無理「そんなこと言わないで語ってください。語ってください」って言って、語っていただいた話なんです。つまりね、家督かとくを譲って、隠居暮らしかくいをしている老夫婦らふふっていうの、民話みわのなかでわりによく出てくるんです。単に老夫婦らふふっていうのは隠居するより仕方がなくなってしまう、なんにもすることがなくなってしまう

った存在を老夫婦という言い方で、永浦さんも正子さんも話されるんですが、その老夫婦の役割がいたっておもしろいわけなんですね。

そして、若い者のすることをちゃんと見ながら、なにも説明してもらえないからわからないんだけど、なんとか自分もわかりたいと思って、しゃにむにわかろうと努力するあたりのおもしろさっていうものがあるって、この小さな話のなかにこめられた人間の姿っていうのが私は大好きで、「これ語ってください」っておふたりに言ったら、おふたりとも、「こんな話、みんな、大勢の前で語るのすかやあ」ってためらわれたんですけれども、「こういう話こそ民話なんですよ」って言ったんです。気取ってるわけじゃなくて、人間の一番だいじなところ、いちばん裸のところを、民話は惜しげもなく物語にして語ってくれる、それは若い者の話だけじゃなくて、こういうふうになんとなくじいさんばあさんだあって、ちゃんとその内容を引き受けながらこうしてみんなに語ってる、これがね、民話なんですよ、実はね。民話の一番芯にあるものなんですね。

こういう話をお願いすると、いくらでもじつは出てくるんです。でも、遠慮してらして、私たちに話すのを遠慮して、「こんな話したんじゃあ」って言われるから、それを取り払ってもらってね、「いいからしてください、いいからしてください」って言うと、こういうおもしろい話がいっぱい出てくるの。みなさんにもこれをひと晩かかってお聞かせしたいぐらいの気持ちですけれども、この場ですので、その「ケヤキ買い」って。「ケヤキ」っていうのは「毛を焼く」ってことなんですよ。こういう話を聞いていただきました。それじゃ次にいきますか。

小田嶋—まだまだ聞いていただくんですけれども、ひとまずここで十分間の休憩を入れたいと思います。

## 〈休憩〉

小田嶋—後半は映像の続きをみていただきます。最初は「キジも鳴かずば」というお話、これは「長良の人柱」とも言われていますけども、これをまず見ていただきます。最初は永浦誠喜さん、次に伊藤正子さんの「キジも鳴かずば」になりますね。じゃあ、まず、見ていただきます。

\* \* \* \* \* 映 像 上 映 \* \* \* \* \*

## 〈キジも鳴かずば〉

1:10:49

◆永浦誠喜さんの語り

まず私から始めさせていただきます。前後あったかもしれませんが、肝心なとこだけになると思います。

## キジも鳴かずば

あるどごで嫁ごもらったら、家にいたときは口立ってたらしいので、もらったのだけんども、そごのうちにいったれば、なにを言っても黙って、まじめに仕事をする、いい嫁ごだけんど、用あることも語んねえような、そういう嫁ごだったんだと。

世間の人達しだつもおしよすい（はずかしい）がら、  
「なにか語れっちゃや」  
って語っても、はっぱりなにも言わねえがら、  
「仕方ねえから、実家さ返すよりほかねえはや」  
って、家中の人達いなが しだつ、みなで相談して、そして、人たのんで、実家さ送ることになったんだと。  
で、実家さ送られる途中で、山の近くでも通ったがね、  
ケンケエーン  
って、キジさかあ叫んだんだと。  
したれば、すぐあとから、どーんと鉄砲撃ぶつ音あしたんだと。  
そしたら、その送られてる嫁ごあ、

もの言うて 父は長良ながらの人柱  
キジも鳴かずば 撃たれまい

って、送っていがれる人さ話したんだと。  
「なかなかこの人は頭いいし、口語んだっちゃやあ」  
って、それで、  
「送っていがねえっちゃやあ。戻っから」  
て。そして、それからあと、いろいろ事情聞いてみたれば、長良ながらの川の堤防、たびたび切れて仕方ねえので、「だれか人柱になると切れなくなる」っちゅうな、そういうことで、言い出したのがその嫁ごおやんの親父めえつあまだったんで、  
「だれも人柱になんねえから、お前、人柱になれ」  
ちゅうて、ちょうどその人柱にされたんで、  
「あまりよけえなこと、語るもんでねえからな」  
って、嫁ごにくるとき、お母がっつあんにそう語られたんで、話なにもしなかつちゅうことわかつたんで、それからあと大切にされて、そごの家うちに死ぬまで嫁さんになっていたんだどっしゃ。  
んで、えんつこもんつこさげだど

(拍手)

小野—ありがとうございました。それでは続いて、正子さんの「長良ながらの人柱」を聞いてみたいと思います。  
伊藤—みなさん、おはようございます。

1:14:35

◆伊藤正子さんの語り

キジも鳴かずば

むかあしむかあしね。

あるところに、うんとへらへらつつうお父<sup>どっ</sup>つあんがいたんだと。あることねえこと、いっそお語<sup>な</sup>って、そごの部落を騒がせたり、村を騒がせたりしでらんだとね。

そごに長柄川<sup>ながらがわ</sup>って川があって、その川が雨降るたんびに橋が流されるんだとね。毎年、流されるから、村の人達<sup>しだつ</sup>が集まってね、

「いったいこの橋、なじよに架けたら流されねえんだべやあ」  
って、みんなして相談したんだと。そしたら、そのへらへらつつうお父<sup>どっ</sup>つあん、  
「なあにや、人柱立でつつど、流されねえどや」  
って語ったんだつものね。

「んだら、人柱立でて、橋架けたらいいんでねが」

「んだげっとも、だれ、その人柱になる」

ところが、だあれもなる人いねがったんだと。そんでね、村の人達は、  
「お前<sup>めえ</sup>がその口出しすたんだから、んだらば、お前<sup>めえ</sup>を人柱にする」  
って言われて、とうとうその長柄川の人柱にされてしまったんだとね。

さあ、お母<sup>がっ</sup>つあんはうんと悲しんだんだと。そごに娘が一人いだったと。年頃になって嫁ごにいぐことになったんだとね。

そしたら、お母<sup>がっ</sup>つあんがね、娘にうんとかたく語ってやったんだと。  
「あのなあ、おら家のお父<sup>どっ</sup>つあんが口語ったばりに、人柱にされでしまったど。お前<sup>めえ</sup>もな、口語んなよ。よけなことぜってえ語ってだめだぞ」  
って、うんとかたく語ってやられたと。

さあ、嫁ごにいったげっとも、なあんにも語んねがったんだとね。聞かれでも、頭で「うん」とか「やんだ」とかぐらいしか言わねがったんだと。

「さあ、器量<sup>かしえ</sup>もいいし、よく稼<sup>おっつ</sup>ぐし、朝は早く起きっし、なあんにも言うことねえいい嫁ごだげっともやあ、唾<sup>おっつ</sup>嫁ごもらったんでは、わがねっちゃや」

そごの家の人達<sup>しだつ</sup>で相談して、  
「んだらば、実家<sup>けえ</sup>さ返せ」  
て。そしてね、隣りのお父<sup>どっ</sup>つあんをたのんで、馬<sup>ま</sup>っこさ乗しえられて、実家<sup>けえ</sup>さ帰ることになったと。

そしたら、その娘ね、  
〈お父<sup>どっ</sup>つあんが人柱にされて、お母<sup>かっ</sup>つあんが悲しんでんのに、おれがまた嫁ご出されていったらなあ、お母<sup>がっ</sup>つあんが、なんぼお悲しむがなあ。泣ぐべなあ〉  
って思ったれば、その朝に涙が、ぼろぼろぼろぼろ流れて、板の間が濡れでしまったんだと。

姑<sup>がっ</sup>お母<sup>め</sup>つあんにね、  
「なんだあ、お前。ごごさ汚したの、お化粧水かあ」

って怒られたんだとね。んでも、なあんにも語んねがったんだとさ。

そして、隣のお父<sup>どっ</sup>つあんが来て、馬<sup>ま</sup>っこさ乗しえられて、実家<sup>ま</sup>さ返されたんだと。泣きながら行ったんだと。途中まで行って、山道ささしかかったらね、キジが、

ケンケエーン

って鳴いたと思ったら、

ズドーン

と鉄砲<sup>ぶ</sup>で撃たれたんだと。そしたら、その娘が、馬<sup>ま</sup>っこの上でね、

わが父も もの言うて <sup>ながら</sup>長柄の橋の人柱  
キジも鳴かずば 撃たれまいぞや

歌詠みしたんだと。

今朝<sup>はは</sup>姑に お化粧水かと 問われしが  
送られ妻の 涙なるらん

二つ歌うたったと。

そしたら、馬<sup>ま</sup>っこ引<sup>とっ</sup>っぱってったお父<sup>おっ</sup>つあ<sup>おっ</sup>んがね、  
「なあんだ、唾<sup>おっ</sup>の嫁<sup>け</sup>ごだ<sup>とっ</sup>って言って、唾<sup>おっ</sup>でもなんでもねんでねえが。こんなにっぱな歌詠み  
までする嫁<sup>け</sup>ごでねえが。んだら、返<sup>とっ</sup>すことね<sup>けえ</sup>っちゃや」  
そのまま、返<sup>け</sup>さねで、そのお父<sup>とっ</sup>つあ<sup>けえ</sup>ま、引<sup>けえ</sup>き返<sup>とっ</sup>してね、また嫁<sup>け</sup>ごになって、それから、  
「ああ、おれが、口語<sup>け</sup>んねえために返<sup>けえ</sup>されたのがなあ」  
て、はじめてそのときわかって、それからというもの、なんでも必要のあることだけは語って、  
それからしあわせに暮らしたどっしゃ。

えんつこもんつこさげだ

\* \* \* \* \* 映像終了 \* \* \* \* \*

1:19:51

【正子さんのキジも鳴かずば】 どこかで聞いたことあるなあって思われた方も多い、<sup>ながら</sup>長良の人柱にされたお父さんのために口をきかなくなってしまった娘の話でした。ただ正子さんの話のなかには、もうひとつ歌が入ってくるんですね。

今朝<sup>はは</sup>姑に お化粧水かと 問われしが  
送られ妻の 涙なるらん

ていう歌。この歌が、この話に入ってきているのはひじょうに珍しい形とっていいかと思うんです。単に「<sup>ながら</sup>長良の人柱」で、軽口をたたいたためにお父さんが人柱になったのを悲しんで口をきかなくなった娘というだけではなくて、その娘が嫁にいった先でも黙って口をきかなかったために馬に乗せられて返されていく、その返されながら歌を二つ詠むわけですよ。で、この話をされながらね、正子さんは今日は淡々と話されたんですけども、何度目かに早坂さんと聞いていたときには、涙こぼされたんですね、やっぱり返されていくところですね。今の嫁と違って、むかしの嫁は、さもないことでも実家さ返されて、返されてもなにも言わないで馬に乗って、てくてく帰っていった、その姿のいじらさしさと健気さともいったらいいでしょうか、それに正子さんは共感されたのかもしれないんですけども、この話、特に「長良の人柱」の話はよく語られるんですが、もうひとつの歌がついているっていうのは珍しいと思うんですよ。

今朝<sup>はは</sup>姑に お化粧水かと 問われしが

## 送られ妻の 涙なるらん

って、家を出されていく妻の涙ということが、この話には出てくるんですよね。そして、話をひじょうに深いものにしているような気がいたします。そして、人柱というものを昔はよく立てたという話は、これに限らず民話のなかでもわたしたち聞くことあるんですけれども、この話はまた一段と人柱という言葉が身に染みて感じられる話ではないかと思います。そして、お母さんが、もう一回言いますと、

### 今朝あした姑ばあに お化粧水かと 問われしが 送られ妻の 涙なるらん

て言って、語るお母さんも涙ぐまれたそうですし、正子さんもこのとこ言いながら、何度か涙ぐまれたんですね。

家へ返されていく嫁の姿というのは、ひとむかし前には、ひじょうに悲しいものであり、逆らうことのできないものであった、その姿を留めながら、なお健気にそれを乗り越えて、みんなの善意で最後ハッピーエンドで終わっているところが、この話のうれしいところではないかなあと思って、今回映像に撮らせていただきました。淡々と語っていただきましたが、正子さんは、この話を語るときには必ず涙ぐまれたことが、私は忘れられません。

#### 【誠喜さんのキジも鳴かずば】

そこへいきますと、永浦さんのほうはさすが男ですね。ひじょうにあっさりと、そのところは乗り越して、そして「送らる妻の涙なるらん」のところは、きれいに省略されているところ、これはたぶん永浦さんのお祖母さんのようさんの思いがここにあるのかなと思うんですね。ちょっと説明しそびれましたが、ようさんは、じつは永浦家の後妻でいらしたっていうんですね。ですから、後添えとしてもらわれていかれて、そのときすでに永浦さんたちは孫としておられたので、その孫をとおして、その家にとけ込むために、ようさんは一生懸命昔話を語られた。字も書けない人だったそうですよ、ようさんは。けれども、お話をたくさん知っていて、それを永浦さんに夜となく昼となく語って残された。

それは永浦さんだけではなくて、正子さんにもお母さんをとおして受け継がれていたということを忘れたくないと思います。話はこういうふうにして、その時代を生きた人の思いと重なりながら、人々の口から口へと語り継がれていったことを思いますと、私達もなんでもいいから、ひとつでもふたつでも話を覚えて、自分の思いをそこに託して、身近な者に語り残すことができれば、どんなにいいかなあということを思わせられながら聞きました。

小田嶋—ありがとうございました。なんか「ケヤキ買い」と、今の「キジも鳴かずば」は、それぞれ誠喜さんと正子さんが、どんなふうにして語りを聞かせられたのかというのを、ちょっと想像させるようなお話ですね。「ケヤキ買い」の誠喜さんのほうは家督を息子さんに譲ってっていう、いかにも家督の男孫に話されたような語りになっているし、「キジも鳴かずば」のほうは、正子さんがお母さんにとっては嫁に行く、外に出してしまう娘なので、いかにも思いをこめて、嫁に行くことの辛さのようなものと、願いのようなものがこもっているのかなあと感じましたね。

最後にちょっと長いお話を見ていただきます、聞いていただきます。これも有名なお話でよく語られるんですが、「尻なりへら」というお話、昔話があります。これも、正子さん誠喜さん両方伝えているんですが、

まず最初に正子さんの「さいしんへら」、次に誠喜さんの「尻鳴りへら」を、まず聞いていただきます。お願いします。

\* \* \* \* \* 映像上映 \* \* \* \* \*

〈尻鳴りへら〉

小野—正子さんから語っていただけますか。じゃあ、正子さんの、「ひょうろんこ、ひょうろんこ」「尻鳴りべら」の話を聞いてください。

1:27:14

◆伊藤正子さんの語り

さいしんへら

むかあしむかあしね。

あるところに、さっぱり流行<sup>はや</sup>んねえ神主<sup>しんと</sup>さまがいたったんだと。だれも、拝んでけろともな人もいっこう来ねがったんだとね。したから、うんと貧乏だったの。

〈とっても、こんでえやあ、おら暮らしていがれねえ〉

と思ってね、神主<sup>しんと</sup>さまの神さま願がけした。一週間の願掛けしたつおね。そしたら、一週間目の晩にね、神さまが枕神に立ったんだと。

「こらこら。お前さな、赤いへらと黒いへらを渡す。このへらでな、赤い方で、人の尻<sup>けっつ</sup>をなでると鳴り出す。黒いへらでなでると止まるんだ。んだげつともなあ、むやみに使ってはだめだぞな」

言われたと思ったらね、はっと目が覚めたんだと。

〈ああ、夢だったのか〉

と思ったんだって。んだけつと、枕元にね、ちゃんと赤いへらと黒いへらがあったったんだとね。

〈ああら、こりゃほんとだかなあ。神さまが置いてってけだんだなあ〉

と思ったんだと。その神主<sup>しんと</sup>さま、その赤いへらと黒いへらを、こうまでえに（ていねいに）見でらんだと。

「だけど、いつ、いつてえ、こいづで人の尻<sup>けっつ</sup>なでんだや。わかられてしまったら、こりゃ、たいへんなことになる」

いつも眺めてばりいたんだと。

〈いつかだれかの尻<sup>けっつ</sup>をなでてみでえもんだ〉

と思ってらんだと。

〈んだけつと、人の尻<sup>けっつ</sup>なでられねえしなあ〉

毎日見てらんだと。

ところが、そのうちにお花見の節、来たつおね。むかしは夜桜見物つうのやったんだと。

さあ、村中の人達があつまってね、はあ、飲めや歌えやで、桜の木の下で大騒ぎになったんだとね。

そのなかにね、村一番の金持ちの奥さま이었다と。

〈どうしえなでるごつたらば、貧乏人の<sup>けっつ</sup>尻をなでたって、こりゃ、だめだ。どうしえなでるんだら、金持ちの人の<sup>けっつ</sup>尻をなでてみてえ〉

と違ってたからね。その村一番の金持ちの家のおがつつあんを、とにかく気にしてらんだとね。

したら、そのおがつつあんが、ぐでんぐでん酔っぱらってしまったんだと。あんまりおもしろくなつてね。そのうち、おしっこ出たくなつたと。むかしは、明かりもなにもついてねえから、草原のほうさ行って、衣装、べらっとひったぐって、しゃーっとやってらと。そご、うしろから、そっこそっこそっこ行って、赤いへらですうとなでて、あと隠れたんだとね。なあに、その金持ちのおがつつあんも酔っぱらってっからはね、わがねえがったんだ。気づかねがったつおね。

そして少したつたら、<sup>けっつ</sup>尻が鳴り出したつんでね。

ふる道 ふる坂 ふる街道の 坂々で  
さいしんへらで なでられた  
そーれで <sup>けっつ</sup>尻が鳴るぞや  
ひょうろんこ ひょうろんこ

ふる道 ふる坂 ふる街道の 坂々で  
さいしんへらで なでられた  
そーれで <sup>けっつ</sup>尻が鳴るぞや  
ひょうろんこ ひょうろんこ

と鳴りだしたと。

はあ、びっくりしてしまったんだとね。

「こりゃ、なじよすんべや」

飲んだ酒っこも、醒めてしまったんだと。

さあ、それでも家さ行って鳴ってっから、こりゃ、たいへんだつたのでね、

「さあ、医者呼んでこ」

そっちの医者呼んでも、なんぼ医者来たって治んねかったつおね。んで、

「あっちの村の医者呼んでこ」

さあ、医者みな呼んだげつとも、なんぼ医者来たって治んねがったんだとね。

そしたら、むかし、おっ<sup>ぼら</sup>祓いつのあった。

「ほんだらば、おっ<sup>ぼら</sup>祓ってこ」

さあ、そっちの<sup>しんと</sup>神主さま、こっちの<sup>しんと</sup>神主さま、みいんなおっ<sup>ぼら</sup>祓ってもらったけつとも、さっぱり治んねんだと。

「こりゃ困ったな。たのまねえのは、あの<sup>はや</sup>流行らず<sup>しんと</sup>神主一人だ。まず、あいつたのんだって治んねえべげつとも、まず、たのんでみろや」

となったんだと。

たのみさきたつおね。さあ、<sup>しんと</sup>神主さま

〈来たな〉

と思って、黒いへらを持って行ったんだとね。

そしたらね、奥の座敷さね、尻の鳴るおがつつあん<sup>へ</sup>と自分だけ入ってね、いっしょけんめ祝詞<sup>のりと</sup>あげたんだと。

祓いたまえ きよめたまえ  
かしこみ かしこみ 申す  
おがつつあんの尻<sup>けつつ</sup>の鳴るのが治りますように  
祓いたまえ きよめたまえ

いっしょけんめ、しばあらく拝んだんだと。そして、黒いへらでさっとなでたと。そしたら、ひたっと止まったんだと。

さあ、これはたいした力持ってるってね、金持ちの家のおがつつあんだから、お膳さつけて<sup>じえに</sup>銭っこ、いっぺえもらったんだと。

「ああ、助かった」

そして、家さ帰って行ってね、

〈くだげっともなあ、たった一回で、おれ、こいつ止めんの惜しいっちな。もう一回だれながなでてみてえ〉

と思ったけっとも、なかなか人の尻<sup>けつつ</sup>なでるってことは、たいへんなんだとね。そんで、考えたんだと。

〈んじゃ、隣り村の村一番の金持ちさ行って、馬<sup>ま</sup>っこの尻<sup>けつつ</sup>なでてみっかな〉  
と思った。むかしは人も馬も同じように共に生きてきたからね。

昼間のうちに、どの馬<sup>ま</sup>っこが一番いいか下見して、夜中に行ったんだと。

そして、その家の一番大事な馬<sup>ま</sup>っこの尻<sup>けつつ</sup>ね、赤いへらぺらっとなでてきたんだと。そしたら、その馬<sup>ま</sup>っこの尻<sup>けつつ</sup>も、やっぱりおなじように鳴り出したんだと。

ふる道 ふる坂 ふる街道の 坂々で  
さいしんへらで なでられた  
そーれで 尻<sup>けつつ</sup>が鳴るぞや  
ひょうろんこ ひょうろんこ

いつまでも鳴ってんだと。馬<sup>ま</sup>っこがたまげて、馬<sup>ま</sup>屋なかで暴れるは暴れるは、うんと暴れんだと。大事な大事な馬<sup>ま</sup>っこだからね、

「さあ、獣医呼んでこ」

なんぼ獣医来たって治んねがったと。そっちの獣医、こっちの獣医、みんな呼んだげっとも、さっぱり治んねがったつおね。

そしたら、どっからか聞こえてきたか、

「なあに、隣り村のな、金持ちのおがつつあんも尻<sup>けつつ</sup>鳴り出して、あの流行<sup>はや</sup>らずの神主<sup>しんと</sup>たのんだれば、治ったつうぞ」

って聞こえてきたんだと。

「んだったら、おら家<sup>え</sup>でもたのんでみろ」

ってなってね、だれかがそこさ、たのみさいったとね。

そしたら来たからね、いったと、その神主<sup>しんと</sup>さま、黒いへらを持ってね。そして馬屋<sup>まや</sup>のなかさ入<sup>へ</sup>って、しばらくしばらく祝詞<sup>のりと</sup>をあげて、暴れる馬<sup>ま</sup>っこの尻<sup>けつつ</sup>を、黒いへらでさっとなでたと。そしたら、その鳴るのが、ひたあっと止まったっつおね。

「はあ、こりゃたいしたもんだ」

まあ<sup>じえに</sup>た錢、いっぺえもらったっつおね。はあ、その神主<sup>しんと</sup>さま、うんと助かったと。

家<sup>い</sup>さいってからね、

〈ほだげっともなあ。おれ、これ以上こういうことしたら、ばれてしまう。これ持ってっちゅうと、おれ、また使いたくなから、これは持ってねえほういいなあ〉

と、その赤いへらと黒いへらを川さ流してしまったんだと。

それからというもの、評判<sup>しんと</sup>になって、その神主<sup>しんと</sup>さま、うんと流行<sup>はや</sup>るようになったんだとっしや。

### えんつこもんつこさげた

(拍手)

小野—川に流れていった赤いへらと黒いへらが、どっかにあつたら拾<sup>ひ</sup>ってきて、わたしもやってみたいなあ、だれかのお尻<sup>し</sup>をなでて困らせてみたいなあと思うんですけど、正子さんの結末では、そのへらはもうどっか行ってしまったんですね。流行<sup>はや</sup>らず神主<sup>しんと</sup>さんは、それから流行<sup>はや</sup>るようになったって。じゃあ今度は、おんなじ話ですが、また永浦さんのを聞いていただきたいと思います。また違うところがいっぱい出てくると思いますので、はい、お願いします。

永浦—小野先生のおっしゃるとおりです。わたしの「ひょうひょうろんこ」を話してみます。

1:37:37

#### ◆永浦誠喜さんの語り

#### 尻鳴りへら

むがし。

なんぼ働いても貧乏で、世間並みの暮らし出来<sup>で</sup>ねえような家<sup>うち</sup>あつたんで。そごの家の、まだ二十歳<sup>はたち</sup>過ぎたばりの若い人あつて、そんで、とてもなんぼ働いても世間並みの暮らし出来<sup>で</sup>ねえから、

〈困ったどきの神だのみつつうことあるから、氏神<sup>うぢ</sup>さまさお願いしてみんべ〉

と、そういうふうにして、三、七、二十一日間、十二時ごろですね、丑<sup>うし</sup>三つごろ、人に気づかれねえように、神<sup>かみ</sup>さまさお願いかけで、むかしの人たち「願<sup>ねが</sup>じょかけ」って言ったのね、願<sup>ねが</sup>じょかけて毎夜毎夜丑<sup>うし</sup>三つごろ、お参りに行ったんだと。そして、二十一日目の晩、毎晩のこと、疲れたもあつたでしょう、お祈りしているうちに、うとうとと眠ってしまったんだと。

そしたら、そごさ、神<sup>かみ</sup>さまあらわれで、

「いまお前さ、表が赤い、裏が黒いへらを授けるから。使いようによっておもしろいことあつから、まず先に赤いほう使ってみろ」

と、そういうお告げあつたと思ったら、目<sup>め</sup>え覚めたと。

そしたら自分の手さ、神さま言ったような、手の平さ隠れるような小さいへら、そいつ握らしえていただたど。

〈みょうなことあるなあ。使いようによって、おもしれえこと起きるからって、そうゆうお告げだったなあ〉

と思って、つぎの日、さっそく人通りのある大きな道路さ出わって、

「なじょうに使ってみたらいいかなあ」

と思って、歩いて行ったら、ある家で馬飼<sup>うち</sup>いでやの、馬の敷ぎ藁、肥やし出し<sup>うち</sup>しでや家あって、道端さその馬繫いでやんだと。

〈あの馬の尻<sup>しり</sup>なでてみっかな〉

と思って、馬さ近寄<sup>しり</sup>って、馬の尻赤いほうでぺらんとなでてみたれば、馬の腹、それからぐぐ一っ、ぐぐっと鳴り出したと。

〈ああ、こいつ、ただおっ立ってっど、おれやったと思われっから〉

と思って、近くに篠竹の藪っこあったから、その陰さ隠れたど。

そしたら、鳴りだしたんだと。ぐぐ一っ、ぐぐっと鳴りだしてから、

ひょーう ひょーう

つう音して、それからあと、

ひょうひょうろんこ ひょうろんこ  
おお道 ふる道 ふる街道の真ん中で  
さいしんべらで なでられて  
そーれで お尻<sup>けつ</sup>が鳴るぞよ  
ひょうひょうろんこ ひょうろんこ  
ひょうひょうろんこ ひょうろんこ

と鳴ってんだと。

馬あ、たまげてしまって、前<sup>めえ</sup>さもちゃがったり、うしろで突っぱねたりしてんだと。そいつさ分がった家の人たちや、肥やし出ししでやの止めて、

「なんだっぺ、これ、鳴りだしたべな。馬たまげてしまって、まずこのとおりにだ。たいへんなことだ」

って、「どうどう、どうどう」って手綱持って近寄っても、治まんねえから、なかなか素直にならねがったんだと。

いつまでもそんな音たでておかせんの、申しわけねえと思ったしするがら、藪から陰からそっと出て、そして通りすがりなようによそおって、そして

「なんですが」

って、そこさ通りがかったと。

「なあんだか、ここさ繫いだやつ、大騒ぎで、馬、大暴れで困っでやんだ」

「ああ、おれ、呪<sup>まじな</sup>いかたわがってっから、おれで、たいてい止めんにいいがもしんねえから」

そして、ぎっしり頭の方押しえてでもらって、つっぱしりもしねえようにしておいて、黒いほうですとなでてやったれば、ぴたんと止まったんだと。

「たいへんお陰さまでがした」

って、そごの家で酒っこご馳走つつおになったり、いろいろと、金もなにももらわねえけども、とにかくよろこばれて、その日はそれで帰ったと。

でえ、かんげ考えた。

〈馬まっこの尻けつ鳴らしたって、さっぱり金にもなんにもなんねえ。こりゃ人の尻けつでもなでるよりほかねえ〉

と。でえ、一対一で尻けつ鳴らすわけにもいがねがら、

〈人のあつまるお祭りのようなとごさ行って、尻けつなでてくれっぺ〉

そういうふうにして、そしてその日はそれで家にいたと。

それからまもなく、隣り村にお祭りあって、そこさ老若男女いっぺえあつまるお祭りだから、そこさ、紙こさくるんで懐さ入れて出かけていったと。

したら、隣り村の一番金持ちの家の、しかも一人娘で孫娘、おばんつあんとその娘と、みななかで一際目立つような格好で、歩いてやったの目についたんで、

〈ああ、あの娘の尻けつ鳴らさせたほういい〉

と思ったから、逆のほうから行って、行きすがりに着物の上から、赤いほうで、ぺらんとなでてやった。そして、あとからついていって見たれば、ぐぐーっ、ぐぐっと鳴り出したから、

〈ああ、鳴るなあ〉

と聞いていたら、鳴り出したと、やっぱり。

ひょーう ひょーう ひょーう  
ひょうひょうろんこ ひょうろんこ

と鳴り出して、始まりは静かに鳴ってやんだけど、だんだんに音高くなつたれば、おばんつあんの袂たもと引っ張って、

「とっても、おれはおしょしぐ（恥ずかしく）なって、尻けつ鳴って仕様しゃあねえがら、はあ、家いさいくべし」

って、おばんつあんとふたり、急いで家さ帰ったと。

家さ帰ったら、道路あ遠くとも、道路まで聞けるように高く鳴ってんだと。少し間を置き置き、

ひょーう ひょーう  
ひょうひょうろんこ ひょうろんこ  
おお道 ふる道 ふる街道の真ん中で  
さいしんべらで なでられて  
そーれで お尻けつが鳴るぞよ  
ひょうひょうろんこ ひょうろんこ  
ひょうひょうろんこ ひょうろんこ

と鳴ってんだど。

で、お祭りのあった日の次の日の、間もなくお昼になるあたり、なじよなふうにしでやかなと思って、たいてい行って治してくれなくてわがんめえと思って、なでた男あそごさ道路行っただ。したら、道路までちゃんと聞けえんだつおん。

で、娘のお尻鳴りだしたそこの家では、  
「なんだっけ、お前、神さまの前で、おしっこでもしたんでねえが」  
って聞いた。

「なにも、おら、しでねえてば。神さま、挿んできたただけだでば」  
「だって、なんだべやあ、こんなことあるつつこと、あんめえちゃや」  
医者呼んで診てもらっても、  
「こいな<sup>み</sup>の診たことねえがらわがんねえ」  
って語る。それから神主さま<sup>しんと</sup>たのんでも、和尚さま<sup>で</sup>たのんでお祈りしても、  
「こいづさ効くようなお祈りは出来ねえ」  
って。

そして、なじよしたらいがんべと思って、そんなふう<sup>に</sup>に騒いでやとごさ通りかがったんで、  
「なんです、たまげておもしえ音しでやんね」  
「おもしえ音だらいがんべ。とんでもねえ音でがす」  
って、おがつつあん、語ってんだど。

「なにでがす」  
「昨日お祭りさいって、鳴りだした尻<sup>けっつ</sup>、だんだんに音高くなって、ご飯もなにも食<sup>か</sup>ねえで、娘泣きながら寝でんだでば」

「そいづあ、てえへんなことでがすね。んだらば、おれ、お呪<sup>まじな</sup>いの心得あるから、やってみてあげすか」

「いやいや、そいづあありがてえこった。やってみでけらいん」  
って言われで、娘寝てた部屋さ行って、黒いほうでべらんとなでたら、びたあっと止まったんだど。

はあ喜ばれて、たあくさんのお金もらって、一生不自由しねえくらい金もらったがら、それでよろこんで帰って、あと、二度とそのへら使わねえようにね、川さ流してしまったんだど。  
で、おしまい

でもね、そのおしりね、そいづあおばんつあんから聞いた話。それからわたしはね、止まりのほうで、少し変<sup>け</sup>えでみたのあんの。そいづもやってみすか。うん。

#### ◇「尻鳴りへら」のもう一つのおわり方

でね、その鳴ってた部屋さ、  
「みなさん出はってけらいん。お呪<sup>まじね</sup>え効かねえとはやあ、出てけらえん」  
って、娘寝てた部屋さ、  
「お尻の方、身さ着けてたもの、全部取ってしまわねえと...」  
娘の姿なんつもの、いままで見だことねえがら、エッチな心起ごして、

「みな取んねえと、きかねえとわがねえから、裸にしてけらいん」  
裸にして、そして黒いほうでぺらんとなでたら、ぴたっと止まった。そういうことに、話のついでに言うときもある。

そしてね、そこの家<sup>うち</sup>で心配して、  
「どうせ、おらとこで、婿<sup>むこ</sup>もらわなぐてわがねえんだが、また鳴り出してからたいへんだから、あの人にや、婿<sup>むこ</sup>になってくれるごったら、ああいう腕<sup>うで</sup>持ってる人だもの、婿<sup>むこ</sup>にしたらなじよだ」

てことで、娘と相談したら、  
「心配だから、おらもそうしてもれえば良<sup>え</sup>がす」  
って。

家、貧乏<sup>へんぱ</sup>だしするから、  
「家<sup>え</sup>さ行って、よくよく相談<sup>さうだん</sup>してみなくてわがねえ」  
って、その日はそれで帰って、つぎの日、人たのんで挨拶<sup>あいさつ</sup>やって、そこの家で跡継ぎ<sup>あとぢぎ</sup>になって、娘と一生、なに不自由なく暮らしたっけどしゃ。

そういう結びに変えてみたんです。だから、そんなふうに変えてみんなのおもしろそうです。ありがとうございます。(拍手)

\* \* \* \* \* 映像終了 \* \* \* \* \*

1:56:46

#### 【誠喜さんと正子さん、同じ話の二つの顔】

小田嶋—ちょっと長いお話でしたけれども、とっても面白いお話でしたよね。「ひょうろんこ」の鳴り音の歌のようところが聞きどころなんですけれども、筋は本当にとってもよく似た、というか同じ話っていうのが分かるんですけども、いろいろ細<sup>こま</sup>かいところでは違いがあるのが、それがまた面白いですよね。

まず、主人公が正子さんは、貧乏<sup>へんぱ</sup>な流行<sup>はやり</sup>らず神主<sup>しんず</sup>さん、神主<sup>しんず</sup>さんですね。誠喜さんの方は、貧乏<sup>へんぱ</sup>けれどもまだ若い、若者の男の人。そこがとっても違いますよね。どちらも願<sup>が</sup>掛けするんですけども、それも一週間と三、七、二十一日というちょっと違いがありますし、もらったへらというのが、またちょっと違うんですね。正子さんの方は、赤と黒のへら二本。誠喜さんの方は、表と裏が赤と黒のち<sup>ち</sup>ちやな一つのへら。同じ話なんだけれどもちょっとずつ違いますよね。お尻<sup>おしり</sup>を鳴らす相手が、馬と人、一人ずつとつか一匹ずつつかつかというか、なんだけれども、正子さんの方は、まずおがつつあん、隣村の金持ちのおがつつあんという、人にやってから、馬にやる。それに対して誠喜さんの方は、まずは馬で、最初はこのへらがどんなふうにするのか分かんなかったんですけど、試してみたら、お尻<sup>おしり</sup>が鳴りだしたっていうんで、それでご馳走<sup>ごちそう</sup>になったけれどもお金はもらえなかったんで、じゃあ、今度は人でやってやれっていうんで、隣村の金持ちの一人娘、若い娘にやってしまう。鳴り出した音も、同じと言えば同じなんだけど、微妙にまた違ってくるし、誠喜さんの鳴り方が、次第次第にお腹が、ぐぐっ、ぐぐっっていうのか、ひょう一、ひょう一って鳴ってくるところが、なにかとってもリアルな感じですよごく目に見えるような鳴り方になっていますね。

どちらも、お祖母さんから聞いたお話は、結局それでお金を儲けて、これ以上やったらばれてしまうとして、川に流してそれを捨ててしまうんですけども、まあもったいないと言えばもったいないんですけども、なにかその人としての慎み<sup>しんみ</sup>というんですかねえ、潔<sup>けつ</sup>さっていうんですかねえ、それを表しているのかなあとも思います。

### 【誠喜さんのもう一つの結末】

ただここで、誠喜さんは、実はもう一つの終わり方を、誠喜さんの言葉によると、自分で少し考えてみた、変えてみたっておっしゃってるんですね。そこがまた面白いんですけども。どうもそういう潔い終わり方では、誠喜さんにとっては、なにかすこし物足りなかったのかなという気もするんですが、若い男だから、それと長者のひとり娘の組み合わせからいって、もっとひとひねり欲しかったんじゃないかと思うんですが、人払いをして娘を、「利かないといけないから」って裸にして、へらでなげて止める。そんなふうな腕をもっている男だから、どうせ婿をもらわないとならない、ひとり娘ですからね、長者としては婿をもらわないといけないので、将来また鳴り出したら困るからということで、その男が婿にもらわれて、一生なに不自由なく暮らすという。

この「自分で変えたんだ」と言ったところ、研究者から言えば困ることかもしれないんですけども、実は私たちとしてみれば、とても面白いように思うんですよね。勝手に変えたのでは、私はこれないではないかなあという気がします。よく昔話の結末で、貧しい男、例えば日雇いの男と長者のひとり娘が結ばれるというお話、昔話でよくありますよね。だから、誠喜さんとしては、貧しい若者と長者の娘が結ばれるという結末が欲しかったような気もするんですよね。何百話というお話を聞いたり語ったりしてきた誠喜さんのお話の世界みたいなものから自然に生み出された、誠喜さんの変えた結末、もう一つの結末だったのかなあという気もします。

以上三つですけども、お二人のお話の違いを味わっていただきました。これ以外にもたくさんのお話が微妙な違いを持って、同じ一つの話が二つの顔をもって語られるんですが、それは、できれば皆さんの資料集なりみやぎ民話の会叢書の民話集を比べてみていただくととってもいいかなあと思います。

最後にですね、お二人がこんなにたくさんのお話をどんなふうにして身に蓄えて、なおかつそれを語るようになったのかということ、同じこの場で語っていらっしゃる映像がありますので、それを見ていただきます。

\* \* \* \* \* 映像上映 \* \* \* \* \*

1:57:22

#### ◆民話を聞き語った思い出

永浦—私のね、その聞いたお祖母さんが死んでから、七十八年になります。それで、七十八年経ちますが、だからその思い出しても違いが、多少違ってることが出てきてんじゃないかと思われる節もあるんです。それがら、正子さんの方は、お母さんを経て同じお祖母さんの話ですから、だからやっぱり違ってきて仕方ねえと思います。どっちがほんただと、そいつは言いませんが、そういう違い、死んでから七十八年、そして、五十年ぐらしゃべらねえで、この間しゃべりだしたのだから、忘れた面もあるし、とり違いの面もあると思います。そのへんお許しいただきたいと思います。(拍手)

伊藤—永浦さんと、本当の源と言いましょうか、話の本は同じですけども、もう大分違ってますね。いま聞いても、すっかり違っているところもありますし、私が抜けているところもありますし、永浦さんが抜けている…。だからって、いま永浦さんおっしゃったように、どっちが本当でどっちが嘘だということも全く

ありません。その人が、どうその話を受け止めるかによって、話も微妙に変わっていくんじゃないかなあと、私は考えております。

永浦—私にはね、ひとり姉あったんですよね。真面目にその祖母さんから聞いたのは、姉と私だけです。私の二つ少ない弟は、「なにそんなごと」って、昔話聞く気なかったし、あとは、きょうだい六人ありましたが、<sup>とお</sup>十の下の子は、じかに聞く機会があまりなかったですよね。私は四つか五つぐらいから、姉いたんで、姉さ語る話を私も一緒に聞いて、そして小学校の四年生までぐらい聞きました。で、学校さ入ってからはね、あのう、昔、屋体〔屋内体育館〕ない時代で、〔雨の日の〕体操っちゅうのは、廊下さ出てそして足踏みしたり、足伸ばしてそれでお終いなんですよ。まあ、戦争前に生れた方は、大体そういう聞こえあったと思いますが、それで、時間あるもんだから、「お話しりしましょう」って、<sup>しんしゅう</sup>先生語って、そして、あと昔話などを話したもので、それで、私の場合には、四年生ぐらいまでにね、他の人たち、知ってる話みな話してしまっただけで、あと二度と先に話した話を繰り返さないように、先生の方で考えて配ってですね、私一人で、数多く知ってるもんだから独演場になってしまったんです。そして、六年生あたりまでにね、大体五十くらいはしゃべったでしょう。明日雨降ってくるとね、「明日、俺語んねくてわがんねがら、お祖母さん、語ってきかしゃらいん」って言って、前の日に聞いて、次の日まで忘れねえがら、大体その頃は。んだがら、二つぐらい聞いていくと次の日、前の日に仕入れていたやつを販売すん〔語る〕にいいんですよね。（会場笑い）そういうごとで、話聞いただけでは、なかなか覚えられないんですが、人さ話してきかせるってことも大切だって、いまは考えています。終わります。（拍手）

伊藤—私はね、話の源は、このよふさんですけれども、私たちの祖母ですけれども、祖母は、小野先生が二才ぐらいのときに、亡くなったっておっしゃいましたけれど、私が生れる前、大正十四年の四月二十九日に亡くなってると思います、お墓に行ってみましたから。それで、祖母の話は聞いたことないんです。

私の兄たち、兄二人と姉がいますけれども、その兄たちは、私よりも昔話は知っています。しょっちゅうこの誠喜さんの<sup>うち</sup>家に泊まりにいつて聞いて、また、その母親〔祖母よふさん〕がしょっちゅう<sup>うち</sup>家に来て泊まって、仕事をしながら、夜はそして昔話を語って聞かせて、孫たちをこう〔身の周りに〕寄せて話したって母親が言ってました。私は、その祖母の話は聞いたことないんですけれども、母親が、私が物心つくころからしょっちゅう聞かせられました。で、大きくなると、弟がいますし、姪や甥が次々と生まれてきましたので、その子に話して聞かせるんです。そうすると、今のような個室も何もございません、ひとつの…。私の<sup>うち</sup>家はランプでした、昭和二十年に電気がやっと点いたんです。それまで、ランプなもんですから、その囲炉裏を囲んで、母親が孫たちにも話す、それを私たちも聞いていたんです。ですから、だいぶ大きくなるまで聞いたので、頭の中に沁みこんだっていうんです。もう、いま何か聞いても、いま聞いたことすぐ忘れる歳になってしまいましたけれども、それはもう、頭の中に沁みこんだもんですから、今でも忘れないで話せる。とにかく、大きくなってからも聞いたんです。はい、以上です。

今度、小野先生と小林さんと加藤先生のお力で、本〔伊藤正子さんの民話集『母のむかしを語り継ぐ』〕に出していただきましたけれども、つい先日、わざわざお出でになっていただきました。それを、私の孫が、女孫が二人おりますし、一人男の孫がおりますが、一番先にその男の孫に、「あんたにあげるからね」って言ったら、その男孫はね、その「ふるみちふるさか」（「さいしんへら」の唄）をね、もう小さいころからもう早口で一所懸命言ったんですよ。ところが、家の嫁がね、「たくや（孫の名前）が上手に言うげつとも、何回聞いても私覚えられないの」って言うのね、それもあります。そしてね、あの話、女孫たちが結婚して、もう

ひこ孫が生まれました、一人はね。もう一人は、今年中に生まれますけれども、「あのさ、私全部読んだけれどもね、ほとんどやっぱり聞いているよ。読んでみたらね、ああ、これも聞いたなあ、これも聞いたなあ、これも聞いたなあと。でも、話すとなったら話せないよ」って言った。「でも、これ読んでみたら、ほとんど聞いているよ」って。一番めの孫はね、小さいとき十話ぐらいはね、話してお母さんに聞かせたんだって。「でも、いまは十話かけてみな話せないね」って言ってだったげんとも、あれを見たら、また思いだして、ああ、これも聞いた、あれも聞いたって思いだすんじゃないかなって。おかげさまであの本ができて、孫たちがね、思いだしてくれるんじゃないかなあと思っております。私、東京にも一年ほど娘のところに行って来ましたのでね、事情があって行って来ましたんですけども、その三人の孫にもしょっちゅう毎晩孫にも語って聞かせたの。そして、「あんだこんど語って」って言ったら、やっぱり覚えて言ってくれたんですよ。ですから、その孫たちにも、孫、十一人おりますからね、その孫たちにも一冊ずつ、子どもたちにも親戚にも一冊ずつはあげたいな、そうしたら、あのときの話を思いだしてくれるんじゃないかなあと思って、また生きるんじゃないかなと考えております。ありがとうございました。(拍手)

小野—なんかとってもうれしい言葉をいただきました。私たちもほんとは語りを文字にするっていうのは、一つの邪道かもしれないと思うんですけど、今、文字にしないと、みなさんに伝えることができないんですよ。ですから、私たちがいっぱいお聞きしたうれしさを込めて、活字にしてなんとか大勢の人が読んでくださって、それを「ああ」と思って、今度は、自分の近い子に話して下さったり、それから、聞いた人は違っても、「ああ、私もこんな話、小さいとき聞いてたぞ」って、今の正子さんのお孫さんのように思い出すよすがにもなっていくかとも思います。そういうふうにして、少しずつ民話これから広がっていけばいいなあということを願っております。

\* \* \* \* \* 映像終了 \* \* \* \* \*

小田嶋—おつかれさまでした。正子さんと誠喜さんがどんなふう暮らしの中で話を聞いてきて、それを語ってきたかというのを、いろいろ端的にお話しされてたと思います。どちらも、それぞれ個性があるんですけども、お二人とも、その人がその話をどのように受け取るかによって、話は微妙に変わっていくんじゃないか。でも、どちらが本当だということではないというふうにおっしゃってましたよね。

誠喜さんの方は、小学校のうちから、クラスみんなに聞いた話を、体操の時間のうちに語っていらっしやっただけですね。だから、小さいときから話を聞いて、なおかつ語っておられた。そして、正子さんの方は、やっぱり小さいときからお母さんのお話を聞いて育ったんだけど、大きくなって、自分の弟や甥っ子や姪っ子にお母さんが話しているのを、自分はまあお手伝いをしたりしたんでしょうね、小さい子に語るのをその傍らで聞いていた。だから、大きくなるまで、おそらくお嫁に行くまででしょうね、聞いていたっていう。だから、身体に沁みついた。なおかつ、今度は、お嫁に行っても娘や孫さんにも語っていらっしやっただけですね。だから、一生をかけて聞き続けてなおかつ語り続けていらっしやっただけなあということが分かりますよね。

記録 山田 裕子・加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

◆ みなさんと感想と意見の交換

小田嶋—はい、では以上でみなさんに視ていただくのは終わったんですが、最後になりましたけれども、みなさんから自由にご意見なり感想なりをいただいて、ご質問でも構いませんので、自由に語り合っていきたいなあと思います。まず、なにか、ここ聞いてみたいこととかありましたら。なにかありますか。

山田裕子 [みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム] —先ほど小野さんがね、永浦さんと正子さんは何回聞いても、お話おなじっておっしゃってましたけど、私が永浦さんのお話、ずっと十回聞かせていただいて、正子さんのお話も聞かせていただいて、すごくとくに心に残るのはお二人の語る姿なんですよ。この民話の学校の時には百人超していたと思うんですが、百人いても、三、四人で聞いても、お二人はすっかり同じなんです。例えば、相手に応じて話を、<sup>こゝろ</sup> 声音を変えたり、姿勢を変えたりっていうことはなくて、いつもおなじで、とても端正なお姿で淡々とお話しなさってたなあっていうのが、すごく心に残っています。

あともうひとつ、私、この「ケヤキ買い」のお話、今日出たお話の中で、「ケヤキ買い」のお話がすごくこの頃、心に染みるんですよ。このケヤキ買いを私が二十年前に聞いた時は、なんかあんまり好きじゃない話だったんですね、やっぱりね。頭から放したい話だったんですけど、二十年経って自分が本当におばあちゃんという年になったら、この老夫婦の姿っていうのが、また違った形で私の中に入ってくるんですね。まず、小野さんがこの時の後の解説で、「正子さんのお話はあっさりしてる。それに比べて、さっきもお話なされたんですけど、家督を譲ったお祖父さんとお祖母さんの話になってるっておっしゃってたんですけど、永浦さんの、家督を譲った後に何にもすることがなくなって、火を焚いて当たってばりいるおじいさんとおばあさん、なんか身につまされるような気になってきました。二人でやっとな、通訳になってっておばあさんのこと言っていましたけど、二人でやっとな生きてるっていうか、力を合わせて生きてるっていう姿っていうのが、すごく自分の身とも重なって、このお話が前と二十年前と全くちがった形で入ってきたな、そして、お二人の話の違いを今、しみじみと考えているところです。感想ですけど。

小田嶋—あ、はい、そちらの方。

女性—私も永浦誠喜さんと伊藤正子さんの本を読ませていただいて、永浦よふさんという方は、涙ながらに語った話を聞く人は涙ながらに聞いたっていうので、とても感動して、いつかこのゆうわ座で永浦誠喜さんと伊藤正子さんのお話を語っていただけないかなあと毎回思ってたんですね。それを、今回、こう言う形で聞かせていただいて本当に感激と感動しております。どうもありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございます。なにか、ご質問でもいいんですが、ありますか。

男性—また、感想なんですが、素晴らしい企画、昔、「男語り・女語り」といわれたルーツを一つにする、男の人から通す話と女の人から通ってくる話、これはなんか学術的にももっと研究されてほしいと思われるテーマを、またこの現代に出していただいたことに、小野さんにも民話の会の皆さんにも、ゆうわ座の皆さんにも感謝申し上げます。

実は、私は伊藤正子さんのお家<sup>うち</sup>の近くに生まれて育っている者で、地元でもほとんど忘れられている残念さをずっと思って、読書会を立ち上げて永浦誠喜さん、伊藤正子さんの語りを、民話の会で記録に起こしていただいたのを長く伝えたいといけなと。私も正子さんのお話は、子どものころからよく聞いて、そ

して学校に来てもらったり、公民館で話を聞いたりして、すごくあの時代が聞くことに熱中して聞いた事を忘れないような、正子さんの昔話っていうのは本当に、今でも亡くなってからしばらく経ちますが、印象に残ってます。

まず、馬の話が出たんです。これは、私たちのいる新田では「馬頭観音像」といって、馬を大切にする、馬が有力な稼ぎ手だっていう石碑がものすごく多いんですね。あとですね、「さいしんへら」のお話、神主さんのお話があったんですが、あの神主さん、実は伊藤家から、過去に山伏、羽黒派の山伏の方が「伊藤えいせん」という方が出てらっしゃるんですね。すごく底流で、埋もれた今までの失われる記憶を取り戻しながら、正子さんも家という流れを受けて、それを伝えようとしているんだと、今日、改めて感慨深く思いました。

民話の可能性ですけれども、私とっても大切だと思います。実は宮城県北、岩手県南に「おしらさま信仰」「羽黒三山信仰」「神楽」そして「釜神」、ものすごく近世期、江戸時代に大衆に流行った民俗の流れがあるんですね。それを永浦誠喜さんも正子さんも話の中に生きている血としてくみ取って私たちに話をしてくれているんですね。民話の可能性として、私は「おしらさま信仰」や「山の神信仰」、特に戦争で男がいなくなったり、出稼ぎで男がいなくなったときに、女の人たちがどのように村落共同体を育ててきたか、守ってきたかっていうことが、これからすごく話題になる時代だと思います。これからの今までのご活躍、民話の会の活動にはたいへん尊敬の念をお抱いております。そしてこれからもですね。それを引き継いで、県北の誰でもいいですけども、この民話の血をですね、なんとか後世に伝えられるようにこのような活動が実るように願っております。本日は本当にありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございます。あのもしよろしければ、その活動のサークル名とかここでもよろしければPRしていただければと思うんですが。

男性—伊豆沼読書会です。

小田嶋—あ、ありがとうございます。正子さんは〔伊豆沼の隣の〕長沼のそばでお育ちになっている、すごく美しいところですよ、蓮の花が咲いてね。今おっしゃった山伏とか、三山信仰とか、馬の信仰とか民話の中にも様々なお話がありますよね。だから、そういう地元の、地域の隠れた歴史と民話って言うのは、二つながらにして両方で補い合って、地域の文化とか根付いてきたものを明らかにする、みなさんに知らせていくよすがになるんじゃないかなと思います。ありがとうございます。あとなにか。

小野—今のお話を聞いて、今日のこの催しをやったことは本当によかったなあって言う思いにとらわれました。ありがとうございます。やっぱり跡を継いでいただいく方々がどんなふうに民話を捉えていくか、それで民話をどんな風に考えていくかっていうことがすごく重要になってくると思うんですね。で、ともすれば「もうこれは途絶えるかなあ」なんて、無力感にとらわれることもあったんですけども、今日のこの催しで、いまいい言葉を聞いて、元気をいただいたような気がして、これからは私たちが頑張っていきたいなと思いました。ありがとうございました。

小田嶋—ほかに何か、言っておきたいことでもありましたら。はい。

女性—すごい素敵な機会だったなあと、今日来てよかったって思ってるんですけども、二〇〇〇年の八月というと、私がちょうど生まれた頃で、あと二十年早かったら、生で聞けたのかなとちょっと残念な

気持ちもあります。

永浦誠喜さんの「鬼打ち木」の話〔「口のない嫁ご—鬼打ち木の由来」『みやぎ民話の会叢書第10集 青島屋敷老翁夜話上』(2001 みやぎ民話の会)〕を以前知って、「子どもたちって大人によって、鬼にも人間にもなったりするんだなあ」って日々思うんですけども。「鬼打ち木」の話も含めて、民話ってハッピーエンドだけではないというか、残酷であったり、ちょっと話すことをためらうようなお話もたくさんあると思うんですけど、最近、絵本とかになるような昔話ってとてもきれいに整備されているというか、そういう描写を排除しようとする、きれいなものだけにしようとするところがあるなああって、ぼんやり生きていても感じるんですけども。伝承していくというか、これからも様々な本当のことというか、どれが本当かという話ではない、どれが間違っていて、どれが本当っていうことではないっていうお話もあったと思うんですけど、その様々な本当を含んでいる民話の形をそのまま受け継いでいくとしたら、民話の会の方々はその整備されていく、この時代にどのように伝えていきたいと思っているのか、ちょっとうかがいたいなあと思いました。すみません、ちょっと緊張していて支離滅裂にうなって申しわけないんですけども。以上です。

小野—とってもいいご意見をいただいてありがとうございました。やはり、私ども民話のおもしろさ、大事さを身に染みて感じながら、これは消えていくのかなっていう不安にも次第に取りつかれてくることもあるときでしたので、今のようなご意見を聞くと本当に息を吹き返すような気がしてうれしいですね。民話は必ずしも、めでたしめでたしじゃなくて、むしろひどい終わり方をして、こんな不公平な終わり方でいいのかしらっていうようなことも、ちゃんと提示してくれるんですよ。私はそこがすごく大事だと思うんです。いつもきれいな事で、ハッピーエンドで終わらせてしまうことばかりを子ども達は味わって生きていったら、非常に体質として弱い物になって行くような気さえます。

そこへいきますと、民話はあまり妥協しないんで、なにもかもつつと出してくれるところがある。そのつつと出してくれる民話を私たちは大事にしていきたいと思うんです。きれいに化粧されてしまった民話として出されてくるものが、世の中にどうしてもはびこってきているというか、そういうものが広がってきているときなものですからよけいに、なまで聞いてきた、素朴な、良いも悪いも含めた話の重要性、重みみたいなのを、これからも皆さんと一緒に考えて、大事にしていくことができたなら、私たちが本当にうれしいと思います。ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございました。本当に、今メディアとか活字の中での民話っていうのは、そういう面白くて楽しくて、それからまあ、きれいでなぐさめになるお話ばかりですけども、じつは本当はそれだけではなくて、もう一面があるんだっていうことを、やっぱり語りを伝承の場で聞いていると、じつは別の面があることを気がつくんですよ。だから、それは常に隠されるというか、無くされて無いことにされてしまうのは確かなんですが、やはりそうじゃなんだぞということを肝に銘じていきたいなと思っています。

関連してですけども、二番目に観ていただきました「キジも鳴かずば」、あの中で、口のきけない嫁のことを「おっつ嫁ご」と言ってますよね。つまり、「<sup>おし</sup>唾」という言葉が出てきてるんです。最初に打ち合わせをしたときに、この「唾」という言葉を、差別用語とされる言葉ですから、どうするかという議論になりました。でも、民話の文脈において、昔話の文脈において、そうした言葉はじつは差別的には使われてはいないんですね。まったくといっていいほど差別的には使われてはいなくて、ここでも口がきけない嫁ごの心情というもの、語れないこと、語らないことに非常に心を寄せているんですね、お話自体が。だからここは、「そういう差別的ではない「おっつ」という言葉を無いことにしてはいけない」ということで、そのままにしたんです。だから、そういう全てをきれいにしてしまうと、そういう文脈さえも消されてしまっ、差別的な

ことも差別的でないことも全て無いことにされてしまうことになるので、それには我々も抵抗していかなければいけないかと、そういうふうに考えています。

あとなにかありますでしょうか。はい。

女性—面白くお話を聞かせていただきましてありがとうございました。その言葉というか、方言にすごい興味があって、始まり方とか、終わり方が「えんつこもんつこさけた」っていうのが、私、山形県が地元なんですけど、私の地域では「とーびんと」っていうふうにお話を閉じることが多くて、この「えんつこもんつこさけた」っていう終わり方が宮城県独特なのか、なにかこう宮城県内を廻っていてもいろんな始まり方、終わり方があるのかっていうところ、もしわかったら教えて欲しいなと思います。

小田嶋—宮城県では多くの場合、「えんつこもんつこさけた」という言い方をするんですが、微妙に地域によっていろいろ変化があります。例えば、浜のほうでは「えんつこまんまん」とかね、「えんつこまんま ぽつとさけた」とか、お面白いですよ。先ほど出てきた「とーびんと」っていう終わり方を、只野とよさんはなぜか「とーびん」で終わられるんですよ、宮城の方なんですけども、ちょっと不思議なんですけど、なぜかはよくわからないんですけども。だから、終わりの[言葉の]意味も、わかったようなわからないような変な言葉だけでも、いろいろ説はあるようなんですけども、とにかくお話の終わりにそういう言葉をつけるっていう、なんかその言葉の豊かさみたいなものがやっぱりあるのかなあと言う気がします。

小野—特徴としましてはね、「むかしむかし」とか、「むがすむがす」とか、語り始めの言葉はたいてい「むがすむがす」で始まるんですけど、なぜか終わりの言葉だけは、地域によって非常に違うんですね。そして、山形ですと「とっぴんばらりのふう」なんていうのも山形で聞いた事ありますし、それから岩手にいきますと、「どーんとはれ」とか「どっとはらえ」とかって。宮城ですと「こんで、えんつこもんつこさけた」「よんつこさけた」というようなふうに、終わりの言葉だけは各地域で違っているっていう、このことの不思議さは、まだ解決されない問題の一つかもしれないと思います。それぞれ学問のある方は理屈をつけて、これはこういう意味だろう、これはこういう意味だろうっておっしゃいますけど、それを聞きましてもあまり納得はいかない場合が多いんですけどね。でも、今後の課題として「何故私たちの先祖は、語りはじめはみんな同じだったのに、終わりはみんなそれぞれ違う終わりようしたのかな」っていうのは、私たちに投げかけられている問題として受け止めて考えていきたい、一緒に考えていったら面白いなと思わせられました。

女性—今日はどうもありがとうございました。講座を受けさせていただいて、その後こう皆さんとこうやって交換し合うっていう場を設けてくださって、本当に年代と共に味わうことが変わってくることとか、自分の課題を見つけていろいろ読書会みたいなのをなさっている方とか、お若い方で二十年、二〇〇〇年くらいですか、その頃にお生まれになって、その頃だったら私本当は聞きたかったなと思うこととか。民話の中にはいろいろ含まれてて、いいとか悪いとかじゃなくって、それを本当にそのまま味わっていくんだっていうお話とか、みなさんと交流する中で、今回この講座を受けさせてもらったことが意義深く、自分の中で来た意味が感じられてて、本当に涙が出るくらい嬉しいです。

私は二十代くらいのときに、民話と出会うきっかけはあったんですけども、ただその時には自分の中で素通りしてしまって、民話っていうものがなにか古いような感じでしたが、今六十代になって、それで改めて民話と出会わせていただいたんですけど、それは小野和子先生の「こころの時代」っていう番組[民話探訪者小野和子を特集した番組。NHK〈こころの時代 宗教・人生〉「ほんとう」を探して](2022年2月13日放送)]

を拝見して、それからなんか手紙もいただいて今日ここに来させていただいたんですが、本当に今日はいいい学びをさせていただきました。ありがとうございました。

小田嶋—本当にありがとうございました。こういうみなさんに、ラフにフラットに意見を交換するというゆるわ座の場を作っていたいただいたのは、メディアテークがこの場を設けていただいたってということもあるので、対等な意見交換の場ってというのはなんとか保って行きたいなという気はします。ありがとうございました。

女性—今日は素晴らしいお話をありがとうございました。私は昔、先生の〈民話の学校〉に出席しました。それで、鳴子の温泉ではみんなと一緒においしいご馳走を食べて、民話を聞きながら民謡を歌ったり楽しい夜を過ごしました。あと、秋保に行くところでもやりましたよね。名前ちょっと出てこないんですけどね。そこでは、やっぱり只野とよさんがいろんな歌を歌ってくれたりして、わらべ歌とか教えてくださって、私の職場で子どもたちに歌って聞かせてとても楽しい思い出がたくさんあります。先生はいつも元気で、声も歳を重ねても昔の声と同じでとても若々しいので、これからもお体に気をつけて、いろんなお話をまたお聞きしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

小野—こちらがお礼を申し上げたいほどです。だんだん民話がみんなから遠ざかって行くのかもしれないなあなんて不安になる瞬間も多々ありますので、今のような言葉をいただくと、やっぱりこれからも民話は生き続けていくし、命を吹き込んでいく私たちが小さな役割を果たせたらいいなって元気をいただいた気がします。ありがとうございます。

女性—それから、「サル嫁ご」っていう話で、先生から女の生きざまを教えていただいて自分を大切にしてくださいって希望をもって、民話を聞くことによって自分が希望を持っていけるっていうふうなそういう私は考えになってます。本当に素晴らしい民話のお話をありがとうございます。

小野—そんな風に活かしていただいてこそ民話なので、私は今の言葉を宝物のすごいお土産にして今日は帰らせていただきます。ありがとうございます。

女性—先生、もう一つ。先生がこの前、河北新報に「私の人生」っていうことで、五回（六回）シリーズで記事出していましたよね。

小野—私が出したわけではないんですけども、記者の人が書いてくれましたね。

女性—それを大事にしまして「仙台弁の会」っていうのを市民センターで立ち上げたのをシルバーセンターで、五人だけですけども、七十代前後の人だけで、仙台弁の会の時にそれを皆で読み上げて勉強のテキストにしました。ありがとうございました。

小野—すごいですね、ありがとうございました。みんなでがんばりましょう。

小田嶋—ありがとうございます。時間も迫ってきましたが、ぜひという方。はい。

女性—時間がないみたいなので。永浦さんと正子さんのご本は拝見して、いつも興味深く拝見していたんですが、今日はお二人のお話を生で聞けて嬉しかったです。ありがとうございます。

先ほど、ちょっと話にでましたけど、民話の中にはダークな部分があるというお話があって、私もどちらかというところの方に惹かれる方なんですけど、今ちょっとだけお話ししたいのは、民話のパワーの方です。私の孫がですね、小学校四年生の女の子なんですけど、ちょっと神経が細くって、よく学校なんかでも傷ついてくる子なんですけど、あるとき、朝から自家中毒で、私が朝からお預かりになったんです。お預かりの役目になったんです。そして、もうぐったりとして寝ているもんですから、「はて、どうしたものかなあ」と思いつつ、ふと思いついてですね、正子さんの若草色の本『みやぎ民話の会叢書第9集「母の昔話」を語り継ぐ 登米郡迫町新田の民話』(2000 みやぎ民話の会)]を出してきました、その中のですね「だんご、だんご」というお話、ご存じだと思いますが、ちょっと頭の足りないお婿さんが、お嫁さんの実家に行って、だんごを食べさせてもらって、その名前を忘れないように「だんご、だんご」と言って帰ってきたら、途中で川かなんかがあって「どっこい」といったら、かけ声をかけたらそれが「どっこい、どっこい」になってしまって、自分の家に帰って「どっこい食わせろ」って言ったら、「そんなの知らない」ってお嫁さんが言うんで、頭をごつんと叩いたらこぶが出て、「だんごのようなこぶになった」って言ったら、「あ、そうだ、だんご」って話を聞かせたら、そのぐったりしてた孫がですね、急に「あははは」と目をキラキラさせて、大笑いをしましてですね。そこから、なんかめきめきと回復しまして、ご飯を食べ出してという、すごい民話パワーっていいですかね、びっくりしたことがあったんです。そして、それからですね、その子は伊藤正子さんの若草色の本の愛読者になりましたね、自分の父親に「こんな話があるよ」って読んで聞かせたりというようなことがありまして。決して民話は、文化財でも骨董品でもなくて、本当に今の子どもたちの中にも生き続けていくんだなと言うことを実感いたしましたので、小さな体験なんですけども、お礼を込めて申し上げます。

小田嶋—ありがとうございます。本当に生きているんだなというのがよくわかりました。ありがとうございました。

佐々木真奈美（東北放送）—すみません。お時間ないところ。t b cラジオで「あっぺとっぺファーマシー」[毎週土曜 8:10~8:55]という番組をしております佐々木と申します。小野和子先生の民話にすごく感銘を受けまして、ことある毎に、今番組では方言を残していこうというふうな、最近核家族で、方言を話せない子どもたちが増えているということもあって、この宮城の方言というのを後世に伝えていきたいということで、番組では方言を中心に扱っているんですけども、その中で小野和子先生の民話っていう、やっぱり方言、民話っていうのは残していかなければいけない文化ではないかっていうことで、ことある毎にご紹介もさせていただいたりしているんですけども、一つだけ、放送にたずさわる者として、一個だけ確認をさせていただきたいことがございまして。著作権はどうなっているでしょう。あの、ご紹介さしあげたときに、たとえば放送でご紹介するとか、イベントで小野和子先生のご本を朗読させていただいたりしたときに、いつも気になっているのが、著作権ってどういう風になっているんだろうって、すごく心配をしながらご紹介しているものですから、もし何かその辺りの法的なところがわかりましたら教えていただきたいと思っているんですが。関係なくご紹介ばんばんしちゃって大丈夫なんですか。

小野—それは大丈夫だと思うんですけども、ちょっと疑問もあるでしょうかね。あの、著作権というような形で私の書いた民話を考えていただいたことがなかったもんですから、今後の問題かとも思うんですけど

ども。ごめんね、返事のようにならなくて。

佐々木—もし、今後いろんな場面でご紹介させていただくときに、そういうことがあればぜひ教えていただきたいと思います。

小野—わかりました。なんかあったときには知らせたいと思います。ありがとうございます。

佐々木—すみません、あの、番組の宣伝までさせていただきまして。t b c ラジオ、朝8時10分から、土曜日の朝です。放送しております。再放送、火曜日の夜9時からです。よろしく願いいたします。失礼いたしました。ありがとうございます。

小田嶋—すみません、その件については、はっきりしたことは我々もわからないんですけれども。本当には厳格に決まっているわけではないように思います。できればその出典というのでもないんですけれども、どの本から引いているとか、そういうことは言ういただければいいのかなと思っています、はい。

あと、ほかにぜひ言っておきたいという...おひとり、ふたりですかね。どうぞ。

女性—押ししているところに失礼します。今日はとてもよい時間を過ごさせていただいてありがとうございました、二つ、お聞きしたいことがあるんですけれども。一つ目は、永浦さんと伊藤正子さんは、従兄妹同士ということで、ご親戚なので「民話の学校」みたいに集まるとき以外にも、交流があったかなと思うんですけども、そういうときには民話の話をされていたのかなと言うことをちょっと気になりました。というのも、最後の映像でどちらの話も違うところはいろいろあるけれども、どっちが本場で、どっちが間違っていると言うことはないというふうにおっしゃってて、その言葉自体がお互いの立場をすごく尊重しているように感じたんですね。家督を継いでいる永浦さんが偉いとかではなくて、例えば正子さんがどうとかいうわけではなくて、お互いの立場を尊重しながら、どちらの物語も大事にしているというふうに感じて。ただそれは物語という共通の物があるからこそ、そういう対等みたいなところもあるのかなと思ったときに、物語の場が解除されたときに、お二人はどういう風に物語のことを話してるのかなというのを気になったので。従兄妹同士として民話のことを話しているときがあったのかなっていうのが、お聞きしたいことの一つ目です。

続けてですみません。二つ目は最後のヘラの話、私は何年か前にもお聞きしたことがあったんですけれど、今回聞いたら、またすごい違う印象を受けたんですね。前に聞いた時は、お尻が鳴る音とかのリズム感とかがおかしいなと思って聞いてたんですけど、今回はなんとなく流行らない神主さんが、お金持ちのお嫁さんのお尻を撫でてみたり、そのシーンをちょっと想像したらなんだか嫌らしいなだとか、神主さんといういちおう神聖なお仕事する人がそんなことしてみたいな、人の矛盾みたいなことをすごい感じたりしたんですね。で、永浦さんも自分なりのちょっとエンディングを作ってみたっていうところも、おかしいなと思いつつも、ちょっとエッチな終わり方をしてるみたいなのところで、なんか人間らしさを感じるみたいなの。先ほどの差別の言葉をそのままに残したとか、今の民話はきれいにあらたまっているというところにつながるかもしれないんですけれど、人には良い面、悪い面、いろんな矛盾を抱えながら生きているというところが民話のところにはぎゅっと隠されているなと思って。そういうところで最初のお話、人の本質が民話には現れているっておっしゃってたんですけれども、小野さんが考える民話を通してわかる人の本質みたいなところを、すごい漠然としているんですけども、おうかがいできたらすごくうれしいです。すみません、長くなったんですけれども。

小野—永浦さんと正子さんは従兄妹同士の関係でいらして、お家<sup>うち</sup>も割合にというか、そんな近くではないんですけども同じ圏内、村のすぐ近くなんですけれども、民話についてね、お互いに話し合うってことはほとんどないっておっしゃってました。わたしも興味があつて聞いた事あるんですね。お互いに語り比べみたいなことするんですかとか、片方が忘れたのを片方でどう思ったか聞くんですかなんて聞いたら、ほとんど二人ではね、話したことがないって返事をいただきました。

それから、最後にもう一つ大事なちょっとおっしゃったことが...

民話に現れている人間の本質的なもの...これは、一つの民話を聞いて、はっと感じて涙がぼろぼろ出てくるようなこともあれば、それから、おなじ話を聞いているのになにも感じないままやり過ごしていかれる場合もあって、それはもうひとえにそれを受け止めてくださる聞き手の方の感性によっているような気がするんですね。ですから、それを押しつけて、この話は悲しんでくださいとか、この話を喜んでくださいというよな、条件付き、私は条件をつけないで、ぱっと出して受け止めて下さる方は千差万別のままで良しと。一生その話を大事にしてたなんて、先ほどの方もちらっと言うていただきましたけど、そういうこともあれば、すごく大事に聞いたのに右から左にすぐ忘れてしまったっていうこともあって、それがどっちがいいとか悪いとかっていうことではないんだらうっていう気がして、そこらへんはすごく自由に、あるいは、言葉は悪いですけどルーズに考えて、のんびり考えていいことなのかなというふうに、私は考えております。いかしら、こんな返事で。ごめんね。

女性—本当にありがとうございます。ルーズにのんびり、私も考え、物語り楽しみたいなと思いました。ありがとうございました。

小田嶋—はい、ありがとうございます。もう一方いらっしゃいましたよね。

女性—去年一月ですかね、震災の伝承の時も、前回は参加した者なんですけど、今回は永浦さんと伊藤正子さんの民話が比べられるということで、ちょっと参加もう一回してみました。前回と違って楽しく聞き比べできました。

私、小学校の時に学校の先生が、宮城の伝説の本を書いたので、皆さん興味ある人買って下さいと教室で言われて、買った時の本を出してきたんです。それをパラパラって見た時に、「宮城県内を歩いて廻って伝承してる人たちの協力がありました」って書いてあったんですよ、後書きというか、最初の方とかに。「あ、そんな人たちがいるんだ」て思った時に、「この〈民話ゆうわ座〉の人たちのことなのかなあ」と思って興味をもって、震災の時にちょっと出てみたいと思って出てきたんですけど、家<sup>うち</sup>の子どもがですね、震災の時に生まれたものですから、ちょっといろいろ思うところがあつて参加してみて、娘の年と同じ震災の時期が流れてたのと楽しいお話も聞いてみたくて参加してみたんですけど。

みなさんのお話を聞いていると、私全然違う感想になつて申し訳ないんですけども、はっと思ったのはお二方のお話が、いっぱいおばあさんからお話、おかあさんからお話、聞いたことを子ども達に話した、あと先生から言われてクラスのみなに報告して話して聞かせたとあったのを聞いた時、ある教育番組で「記憶術」というんですか、学生さんがどうやって勉強を記憶するかっていう特集を観たのをふっと思い出したんです。ていうのも、どうやったら勉強って難しくてわからないけどどうやって覚えるのっていう特集だったんです。で、この中で覚えるのが「聞いてしゃべる」あとは、「好きな人に教える、勉強を教えると覚えるよ」という記憶術の特集だったんですけども、そういう自然の記憶術っていうか、聞いてしゃべって、聞いて

しゃべって、記憶にこの人たちは残してたんだなってこのDVDを観てはっと思い出したものですから、ちょっとそのことを感想に言いたいなと思ったもので。すみません、伝説とか民話とかと関係ないんですけども。ああ、こうゆうので記憶しててこうやって伝えて覚えていられたんだな。しかも若いときにそうやることで長く記憶できたんだな。で、なんとなく自分の中で合点がいった一日でした。ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございます。

小野—聞いて記憶するって今、おっしゃいましたが、私どもは、震災の年に南三陸町のホテル観洋っていうところを会場にしまして、被災された民話の語り手の方、六名に来ていただきまして、大抵全員家は流されなされたし、奥様を失ったっていう方もおられましたし、兄上を亡くしたっていう方、そういう方が全員集まってくださって「民話」というひとつのつながりを持ちながら、あの場で、あの日を3.11の日を語ってくださいましたね [第七回みやぎ民話の学校「2011.3.11 大地震大津波を語り継ぐために—声なきものの声を聴き形なきものの形を刻む」(2011年8月22日～23日 本吉郡南三陸町 南三陸ホテル観洋)]。ですから、民話っていうのはなにも「むかしむかし」のことだけではないだろうと思うんですね。私たちが、こうして身近に感じていることや悲しんでいること、喜んでいること、そういうこともみんな、いつかは民話のようになって伝えていきたいし、伝わっていくものなんじゃないかなっていう、そういう捉え方をして民話を考えていきたいなっていうふうに思っております。先ほどのお言葉の中からこんなことを感じましたので、言わせていただきました。ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございます。あと、ぜひという方がいらっしゃらなければ、一応これで。あ、はい、どうぞ。

長崎由幹(撮影スタッフ)—すみません。撮影しながらどうしても言いたくて。永浦さんも伊藤さんも幼いころに聞いた話を一生かけて、自分の支えにしているのを見るにつけすごく感動しました。なので、なんか子どもはあなどれないし、なんか大人が試されているんだなっていうのが、すごく感じました。はい、以上です。

小田嶋—そうですね、大人が、親が、試されているということですよ。はい、ありがとうございました。もしなければ、一応これで終わらせていただきます。本当にみなさん、今日は忙しい中を集まってくださしまして、ご意見を出していただきまして、本当にありがとうございました。では、終わりにしたいと思います。

(拍手)

3:09:06

飯川—進行して下さいました小田嶋さん、小野和子さん、ありがとうございました。どうぞ拍手でお見送り下さい。本日はご参加、長時間にわたりましてありがとうございました。本日はこれでゆうわ座を終了いたします。積もる思いもあるかと思えます。ぜひ、アンケートにご記入いただきまして、入り口の方でご提出お願いいたします。

なお、これまでに開催したゆうわ座の映像記録はDVDになっております。また、本日ご紹介しました永浦誠喜さん、伊藤正子さんのDVDも同じく二回の映像音響ライブラリーにてしておりますので、ぜひご関

心ある方はご利用になって下さい。あと、会場後方で関連書籍の販売もしばらく行っておりますので、ご覧になってお帰り下さい。

それでは、お忘れ物ないかどうかご注意くださいのうえ、お帰り下さい。本日はご参加誠にありがとうございました。

3:09:56

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

—以上—